Vol.3 テーマ

自立と自治

＊結晶母＊

テラルネ

P04.　テラ・ルネッサンスが考える「自立と自治」

P08.　東日本大震災復興支援 ーこれまでとこれからー

—— P08-P09　大槌刺し子がつむぐこと

—— P10-P13　あなたにとって、刺し子プロジェクトとは、なんですか？

—— P14-P19　「大槌復興刺し子プロジェクト」の自立に向けて

P20.　企業から見えてくる自立支援の価値

—— 株式会社 坂ノ途中 × 認定 NPO 法人テラ・ルネッサンス　特別対談

P26.　「自立と自治」の大切さ ーアジア事業編ー

—— P30-P31　インターン・エッセイ（クラウドファンディングを利用した資金調達）

P32.　「自立と自治」の大切さ ーアフリカ事業編ー

—— P36-P37　インターン・エッセイ（インターン生が見たウガンダ）

P38.　「認定ＮＰＯ法人」をテーマに徹底討論

—— 市民が支え、参画する社会づくりのために

森本純代（京都市市民活動総合センター） × 中山麻衣子（税理士） × 栗田佳典（テラ・ルネッサンス職員）

—— P44-P45　税理士マイコが教える認定NPO法人徹底解説

P46.　協賛広告

3 年前、岩手県陸前高田市を訪れた時、
津波ですべてが流された瓦礫の中で、立ち続ける一本の松の木を見ました。

過去の度重なる津波から高田の町を守ってきた高田松原、
約 7 万本の松が流される中、唯一、生き残った「奇跡の一本松」でした。

一本になっても、しっかりと土に根を張り、風を感じ、太陽の光を浴び、
生態系と必死につながりながら、自分の力で立ち続けようとする、
その姿を見た時、思いました。

私たち人間も、どんな困難に直面したとしても、
周囲とのつながりさえ失わなければ、必ず、
自分の力で自立することができるのだと。

あれから 3 年、アジアやアフリカでは、紛争によってすべてを失った多くの人々が、
自分の力で立ち上がり、自立することができました。

そして、今は、地域の復興を担う一員として、自分の家族だけでなく、
近隣の貧困層住民を手助けしたり、地域の将来について考えるようになりました。

紛争中、あらゆる自由を奪われ、長年、自分の将来さえ
自分の意思で決めることができなかった彼ら彼女らは言いました。

自分の意思で地域の課題に取り組むことは、負担ではなく、
喜びであり、誇りであると。

今回の結晶母は、私たちが支援の現場から学んだ、
テラ・ルネッサンスらしい「自立と自治」について、
皆さんと共有できればと思っています。

テラ・ルネッサンスが考える

「自立と自治」

――― 海外の支援活動でも国内の平和教育（啓発活動）においても、テラ・ルネッサンスが常に大切にしていることは「自立と自治」であるという。「自立と自治」が意味するものとは何か。当会の広報・デザイン業務を担当する小田を聞き手に交え、小川、鬼丸とともにこの本質に迫った。

自立とは、周りとのつながりを意識して、自らのチカラで生きること

小田　まず、改めて「自立」の定義とは何でしょうか？

小川　自立という言葉を辞書で引くと、「他への従属から離れて独り立ちすること」とありますが、私たちの考えている自立とは、周りから切り離して、独りで立つ（独立）とは同義だとは思っていません。むしろ、周囲とのつながりを意識しながら、自分の力で生きることだと捉えています。

鬼丸　実際に、途上国であっても日本であっても、誰一人、独りで生きることはできません。家族、友人、知人だけでなく、地域の人々とのつながりの中で私たちは生きています。グローバル化が進み、世界中が益々相互に依存している現代においては、私たちの生活は、まさに世界中の人たち、そして自然資源に依存して成り立っているともいえるでしょう。

小田　なるほど。自分の力で生活していると言っても、周囲との関係性を常に意識することが大事な視点だということですね。では、海外事業では、具体的に何をもって、自立したと捉えているのですか？

小川　私たちが活動している途上国の人々は、生存と生活を脅かす様々なリスクを抱えて暮らしています。そんな状況で、一人ひとりが「自らの力でこうしたリスクに適応して、人間らしい暮らしを営めるようになること」を自立と捉えています。

　具体的には、安定した収入を得ることや、失業した際に十分な貯金を蓄えておくことなど、一人ひとりが様々な困難を自分の力で乗り越えていく手段を持つということです。アフリカでは、現金収入だけでなく、自給食料を安定的に生産することや、家畜を飼うことなども自立にとって重要な要素になってきます。

個人の自立、地域の自立、国の自立は、相互に関連している

小田　一方、一度は自立できても、それを維持していくということは、不安定な途上国ではとても難しいように思いますが、その点はどのように考えていますか？

小川　だからこそ、周囲との関係性を意識することが重要だと思っています。個人が自立できたとしても、地域経済が大きな打撃を受ければ、個人ではどうしようもない状況も発生します。ですから、個人が自立し続けるためには、地域の自立が重要になってきます。同じように、地域が自立し続けるためには、国が自立していることが大事になるということです。誰もが自分が自立した生活を続けるためには、周囲の状況に関心を持ち続けなければならないのです。

鬼丸　同時に、逆も言えます。つまり、いくら国が海外からの援助に頼らずに自立をめざそうとしても、地域が自立できていなければ、それは困難を伴いますし、地域の自立も、そこに属する一人ひとりの自立が不可欠です。ですので、国は個人の自立を真剣に考えるべきですし、テラ・ルネッサンスとしては、一人ひとりの自立が、地域の自立、そして、国の自立へとつながると考えて活動しています。

小田　個人の自立、地域の自立、国の自立は切っても切り離せない関係にあるということですね。では、「自治」とは、どのように定義されていますか？

自治の第一歩は、主体的に社会の課題に取り組むこと

小川　私たちの考える自治とは、「自分の将来や、地域の課題、国の未来について主体的に取り組む『責任と権限』を持つこと」です。自らが変革の主体者として、社会の課題に関心を持つことが、自治への第一歩だと思っています。

　国全体にとって本当に望ましい決定（社会的選択）をするためには、選挙をして代表者に任せるだけでは不十分で、市民が主体的に関わっていくことが重要だと考えています。そして、この自立と自治を進めていくプロセスこそが、真の民主主義の実現に向けて大事な鍵になるとも思っています。

小田　なるほど、社会課題を自分事として考える人が増えることが、民主主義を成熟させる上においても重要だということですね。しかし、自分のことで精一杯の人が、他人や地域の課題、ましてや国レベルの問題に目を向けることは難しいのではないかとも思いますが・・・

鬼丸　たしかに自分の衣食住も満たせないような人が周囲のことに関心を持つことは簡単ではないと思います。しかし、実際にアフリカで出会った元子ども兵たちや、当会にご寄付下さる支援者の方々を見ていると、必ずしも、そうとは言い切れないのです。

小川　例えば、元子ども兵には、生活費を支給していますが、彼ら彼女らは、それを自分の意思で他人の為に使うことがありますし、地域の孤児を自分の子どもとして養育している元少女兵もいます。また、訓練後、わずかな収入を得ることができるようになった元子ども兵らが、自らの生活費を抑

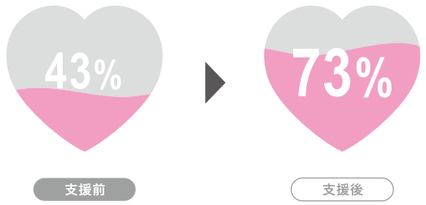
小川真吾（テラ・ルネッサンス：理事長）
大学卒業後、青年海外協力隊員としてハンガリーに派遣、旧ユーゴ諸国とのスポーツを通した平和親善活動などに取り組む。帰国後、カナダ留学などを経て 2005年より、テラ・ルネッサンス、ウガンダ駐在代表。ウガンダ及びコンゴ民主共和国における元子ども兵の社会復帰支援事業などに従事し、2011年テラ・ルネッサンス理事長に就任。

鬼丸昌也（テラ・ルネッサンス：創設者・理事）
高校在学中にアリヤラトネ博士（スリランカの農村開発指導者）と出逢い「すべての人に未来を造りだす力がある。」と教えられる。様々な NGO 活動に参加する中で、異なる文化、価値観の対話こそが平和を造りだす鍵だと気づく。2001年、立命館大学在学中にNGO「テラ・ルネッサンス」設立。テラ・ルネッサンス理事。

小田起世和（ワトナス：代表・デザイナー）
長崎県出身、祖母をヒバクシャにもつ被爆３世。2013年にデザイン事務所「ワトナス」を設立。非営利団体をはじめ、教育機関や商業施設等、様々な領域でデザインを実践する。2012年よりテラ・ルネッサンスの年次報告書を制作以降、あらゆるデザイン業務に従事。2014年より広報企画・デザイン業務の担当者となる。

04. 自尊心の変化

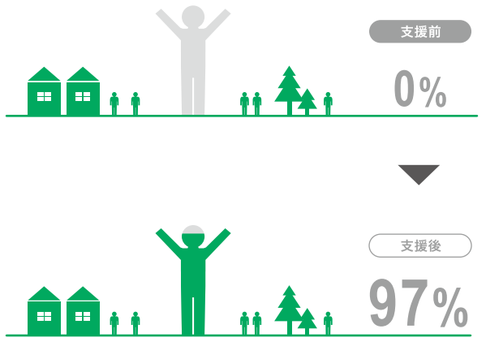
ウガンダの元子ども兵の自尊心（ローゼン・バーグ自尊感情尺度）の変化



※レジリエンスとは、様々なリスクや困難な状況に直面しても、自らに内在する多様なチカラと周囲との関係性の中で、それを乗り越えていくしなやかな適応能力のこと。周囲に植物を育む水と太陽のような存在があれば、誰もがそのチカラを発揮することが可能であるとテラ・ルネッサンスは捉えて、外から援助する側の役割は、その自然の成長（多様な発展プロセス）を尊重し、対象とする国や地域、人々に内在するチカラが発揮できるような土壌環境を整えていくことだと考えている。

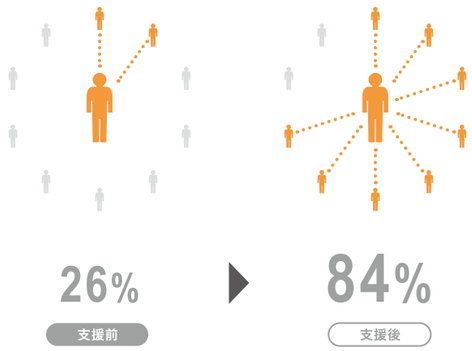
03. 地域社会への参画度の変化

地域の相互扶助活動に参画しているウガンダの元子ども兵の割合の変化。



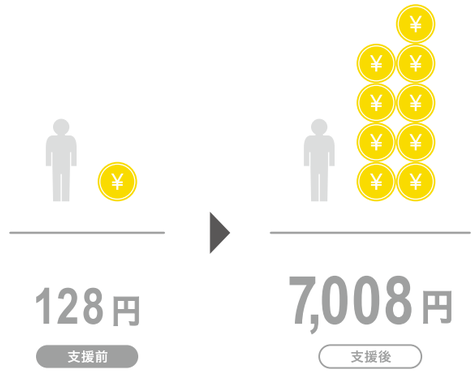
02. 周囲との関係性の変化

ウガンダの元子ども兵の近隣住民との関係性の変化。（地域住民からの差別や偏見、疎外感を感じていない元子ども兵の割合の変化）



01. 自立の度合い（収入の変化）

ウガンダの元子ども兵の収入の変化。支援後の平均月収（約7,008円）は、現地の公務員とほぼ同等の水準。



えて、近隣住民のために所得を使うこともしばしば見受けられました。自分の生活も安定していない元子ども兵たちが、あきらかに、自分の生活水準が落ちることを知りながらも、このような行動をとるわけです。

どれだけ貧しくても、人は他者を想い、行動することができる

鬼丸　日本で震災があった時も、真っ先にアフリカの現地スタッフたちが、津波の映像を見て、募金を集めてくれましたよね。あきらかに、私たちよりも貧しく、不安定な生活をしている彼ら彼女らが5万円（現地の半年以上分の月給額相当）ものお金を日本人のために集めてくれました。

一方、日本でも、伊豆の不動産会社さん（株式会社伊豆太陽ホーム）は、仲介手数料の1％を当会にご寄付頂いていたのですが、リーマンショック後、売り上げが減少し、寄付額が半分近くになったことがありました。普通なら寄付を止めてもいいタイミングですが、その時に、寄付額を仲介手数料の2％に倍増してくれたのです。つまり、自分（自社）が経済的に豊かだから、寄付をするとは限らないのです。実際に、いくら大富豪になっても社会貢献に関心を持たない人がいる一方で、貧しいアフリカの人たちが寄付をするという現実があるわけですから。

小田　なるほど。一般的には、経済的に豊かになってから、周囲の人を支えて社会の課題に取り組むというふうに段階的に考えがちですが、必ずしもそうとは限らないということですね。では、最後に、自立と自治を促進する上で大切だと思うことを話してもらえますか？

主体的な意思決定を尊重することが「自立と自治」を促進する基本

鬼丸　まず、大切なことは、一人ひとりの主体的な意思決定を尊重するということです。対象地域のことを一番よく知っているのは、その土地の人たちですから、地元の人たちの決定をできる限り尊重することが基本だと考えています。

小田　そうすることで一人ひとりに「責任と権限」が芽生えてくるということですね。

小川　地元の人たちに「責任と権限」を持って頂くには、こちらも任せる勇気と覚悟が必要だということです。

援助する側の私たちは、貧しくて教育水準が低い後進国の人たちよりも、自分たちのほうが物事をよく知っているので、問題の解決方法も自分たちがすべて決めた方がいいと勘違いすることがあります。しかし、その土地で効率のいい物事の進め方や解決策を知っているのは、実は、その土地で生まれ育った地元の人たちということがよくあるのです。

鬼丸　つまり、相手を子ども扱いして、将来を決定する能力がないと勝手に決め付けないということです。どんな傷を負っていても、「一人ひとりには未来を創る力がある」と信じることが大切なのです。

小田　なるほど、相手を子ども扱いして観てしまうと、どうしても相手の判断を頼りなく感じたり、間違っているのでは、と思うことはありますよね。特に合理的な説明が返ってこない時は・・・

自尊心を取り戻すことが、「自立と自治」を促進する鍵

小川　実際の現場では合理的な説明が得られないことのほうが多いです。しかし、9年間のウガンダ事業の評価から、興味深い発見がありました。それは、元子ども兵の「自立の達成度」と「自尊心」に相関関係が見られたことです。そして、自尊心が高まっている元子ども兵にその理由を聞くと、「近隣の老人に食事を作ってあげているから」、「近隣住民に洋裁技術を教えているから」など、他者や地域社会の願いを自らが果たしていることを指摘する回答がほとんどだったのです。

小田　一見、他者のために何かすることは本人の自立にとって負担になるのでは、と考えてしまいがちですが、むしろ、本人が自発的に他者のために行動することが、自尊心の向上につながっていたということですね。

小川　そうです。そして、そのことが自立の達成にもつながっているということなのです。

鬼丸　私たちから見れば、本人の自立にとっては効率的、合理的ではないと判断するような行動も、実際には、自尊心という変数を介して、自立と自治を促進することにつながっていたというわけです。

小川　自立と自治が促進されるプロセスは、人や地域によって非常に多様で複雑ですので、一人ひとり（それぞれの国や地域）の状況に合わせて支援していくことが重要です。

地元の人たちが自分たちの国や地域に誇りを持って、安定した生活を取り戻せるように、テラ・ルネッサンスとして、これからもレジリエンス（※）の視点を大切にしながら、自立と自治を促進していきたいと考えています。

――テラ・ルネッサンスに「自立と自治」の大切さを気付かせてくれたのは、カンボジアやウガンダ、岩手の人々でした。レジリエンスや自尊心というキーワードも元子ども兵の社会復帰支援の現場から学んだ視点です。これからも、現場の経験から学び、テラ・ルネッサンスらしい援助のあり方、社会変革のあり方を追求していきたいと考えています。

大槌刺し子がつむぐこと

「津波が町を飲み込んでいる映像をニュースで見た。アフリカから遠く離れた日本で元子ども兵たちを支えてくれている日本の人たちがつらい思いをしている。そんな思いをしている日本の人たちを助けたい」

ウガンダ事務所のスタッフや支援を受けて自立した元子ども兵たちから集まったお金は、ウガンダでの公務員の月給の半年分以上にもなる額でした。

「ところで、テラ・ルネッサンス本部はどんな支援をするの？」

「ともつな基金 linking together」と名付けた、東日本大震災における被災者支援事業も、開始から3年が過ぎました。支援の内容も、現地で生活に必要なものを届ける緊急人道支援から、中長期的な生活再建支援に移っています。

Photo by t.koshiba

Photo by t.koshiba

現在の支援事業の内容は、日本に昔から伝わる手仕事の一つである「刺し子」を活用した商品の企画・製作・販売を行う、大槌復興刺し子プロジェクトの運営です。東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県大槌町。「何もすることがない」と、避難所にいたおばあちゃんの一言から、針と糸でできる「刺し子」を手仕事として提供することを思いたったボランティア5名が立ち上げ、2011年8月、テラ・ルネッサンスに運営が委譲されました。

テラ・ルネッサンスが大切にしていること。それは、一人ひとりに寄り添い、自ら立ち上がれるよう手助けをすること。そして、目の前にある問題に対して、自ら決定し、行動に移せるようになること。ウガンダでも、カンボジアでも、岩手でも、その考えに変わりはありません。

2014年9月現在、183名の刺し子さん（刺し子の商品製作を行う人）に、Tシャツやふきん、コースターなどの商品製作代金2566万2965円を支払うことができました。

多くの人に支えられてきた「大槌復興刺し子プロジェクト」の「これまで」と「これから」をお伝えします。

あなたにとって、「刺し子プロジェクト」とは、なんですか？

これまで大槌刺し子を支えてきた人々に「あなたにとっての大槌刺し子とはなにか？」について、答えていただきました。

2011

平成23年5月　大槌復興刺し子プロジェクト、始動

5月　スタッフ吉野、着任
スタッフ関、着任

6月　スタッフ秋田、着任
WEBサイト立ち上げ
コースター／ふきん発売開始

7月　ap bank fes '12 出店

8月　運営母体をテラルネッサンスへ移譲
遠野市に事務所を開設

10月　スタッフ牧野、着任

11月　スタッフ鈴鹿、着任
スタッフ秋田、離任

12月　WEBサイト リニューアル

12月　アパレルとの初コラボ
「刺し子スーツ」（リマニアノワークス）様

大槌刺し子
ヒストリー

未来を創るチカラを与えてくれる大槌刺し子

震災後、大槌に新しい産業を創生することを願い立ち上げた、大槌復興刺し子プロジェクト。復興の文字が不要となる日を想い描き、立ち上げスタッフ、テラ・ルネッサンスのスタッフが本音でぶつかり、一つずつ積み上げてきた日々。夜通しで Skype 会議をしたこともあれば、幼い子供たちを連れてイベントで販売したことも。そうした過程を経て、大槌刺し子は、ぼんやりとしていた未来を具体的な姿として描くことのできるプロジェクトへと育っていきました。そして、今、まさに大槌刺し子は、自らのチカラで羽ばたこうとしています。その羽ばたきによって、刺し子さん、スタッフだけでなく、お客様、ビジネスパートナなど、関わった全ての人に未来を創るチカラを与えてくれる存在であり続けてくれることを願っています。（写真／楽しかった夏フェス ap bank fes '12）

五十嵐 順子
運営手伝い／プロボノ

大槌事務所で過ごした3カ月、一番の楽しみは刺し子会！

私は 2013 年 1〜3 月の 3 カ月間、大槌事務所にて現地のアドバイザーとして参加させて頂きました。当時は、すでに立上げから 2 年弱経過し、東京チームが担当する企画や販売は順調でしたが、ものづくりの現場である大槌では、生産や在庫、会計の管理が充分にできておらず、不安定な状態が続いていました。それを現地スタッフとともに整理し、円滑に動かす仕組みや今後のプランを作成したのですが、スタッフの皆さんが毎晩夜中まで必死に取り組む姿に、何度も頭の下がる思いがしたのを覚えています。現地で楽しかったことは、何と言っても週2回の刺し子会です。刺し子さんたちとお喋りをしながら、アイロンがけや包装をするのですが、いつも本当に優しく温かい気持ちになり、皆さんの刺し子会に対する愛情を感じました。このプロジェクトが、今も継続し成長しているのは、関わったすべての方々の気持ちの結晶だと思います。これからも長く輝き続けるよう、応援しています。
（写真／刺し子さんと一緒に商品の仕上げ）

津野尾 尚子
岩手事務所アドバイザー／
プロボノ

遠く離れた故郷・岩手との大切なつながり

やはりどうしても東日本大震災とは切り離せないのですが…私にとって刺し子プロジェクトは、震災と共に「人生を変えたもの」です。自分のことばかりに追われ、いろいろな不義理を重ねて生きてきましたが、震災で自分のルーツである故郷が大きな被害を受け、大きく価値観が覆りました。遠く神奈川からでしたが、そうして故郷・岩手と向き合い、できることを続け、立ち上げに関わった刺し子プロジェクト。ある部分では自分の分身のようにも思っていますし、故郷とのつながりを感じられる大切な存在です。このプロジェクトの主役である刺し子さんたちと直接言葉を交わし たり、触れ合う機会は限られているのですが、首都圏のイベントでお客さまに刺し子プロジェクトの紹介や商品の説明をするときは、いつも刺し子さんを近くに感じています。大槌の女性たちが望む限り、永く続いてほしいと願っています。（写真／2013年5月、念願の七福にお邪魔して 小川勝子さんにお会いできた時の写真）

澤向 美希
商品企画／プロボノ

仲間と3年半の全力を注いだ結晶

震災から3週間。何も出来ない自分に耐えきれず、妻と二人の息子を東京に残して故郷の岩手に戻りました。延々と続く沿岸部の筆舌しがたい光景。その中でも大槌町は併発した火災などもあり特に被害甚大でした。大槌に腰を据えて手探りで仲間と共に支援の形を探る日々。1ヶ月が経ち避難所からのリクエストを受けて物資を直送する仕組みを構築して、ひとつの役割を終えたと自分に納得し東京に戻りました。それら一連をきっかけに出会ったのが吉野さん。刺し子プロジェクト萌芽の瞬間でした。今となってはただただ「大変だった」という漠然とした記憶だけが残っています。その日を境に平穏だったことはありません。刺激的な（時にストレスフルな）出来事に事欠かず、とにかく走り続けた日々でした。それでも刺し子さんをはじめ笑顔や関わる人々の笑顔をみるとご支援いただいたみなさまと仲間、そして家族には感謝しきりです。（写真／売れなかった大槌刺し子の最高傑作「花鳥風月」）

久保 光義
プロジェクトマネジメント／
プロボノ

2012

平成24年1月　モビールTシャツ発売開始

2月　飛騨さしこ二ツ谷、着任
（2か月間 刺し子技術支援）

4月　ランチョンマット発売開始

7〜8月　ap bank fes '13 出店

9月　フェリシモ様とのコラボ商品発売

10月　大槌刺し子感謝祭2012 開催

12月　パーカー発売開始

「 あなたにとって、刺し子プロジェクトとは、なんですか？ 」

自分が愛を持って伝えられる仕事

大槌刺し子も皆さんに支えられて３年になります。私が刺し子をはじめたころには、こんなに続くとは思っていませんでした。多くの支援してくださる方々や、ボランティアの方々と接することができ、大槌を紹介していくにつれ、これまで以上に大槌を大切に思うことが出来ました。私にとって刺し子とは、「こどもたちに愛を持って伝えられる手仕事」だと感じています。まだまだ未熟ですが、手仕事の良さや、何のために刺し子という伝統を大槌でやっているのか、もっともっと研究をして目指していることを、自信を持ってこどもたちに伝えることが私の夢です。そして何よりの収穫は本当にお互いの事を思い、辛さや涙さえも笑いに変えてしまう大切な仲間が出来たことです。大槌を愛し、明るい未来を作っていける場所にしていこうと思います。（写真／初めてのイベント参加）

佐々木 静江
岩手事務所／
販売管理担当

楽しく、ずっと続けている趣味

僕の中で刺し子プロジェクトの活動は、今ではもう趣味となっている。平日は、机に向かい仕事をし、週末になれば色々な場所に出かけて行って刺し子を販売する。こんなルーティンが僕の中で出来上がっている。刺し子プロジェクトには、仕事だけでは得ることのできない充実感を感じている。普段の仕事では、沢山の人と出会う機会も少なく、異業種の方と会うこともあまりない。刺し子を販売していると、様々な職種の色々な年代の人と出会うことができた。お客さんだけでなく、イベントのスタッフ、隣のお店の方々など。その時だけで終わらず、繋がりが続き、そこからまた新しい繋がりが生まれる場合もたくさんあった。刺し子プロジェクトに出会えて本当に感謝している。そして、今週末はどんな新しい出会いが待っているのかワクワクしている。（写真／大槌刺し子のスタッフ全員そろった貴重な一枚）

松尾 英尚
売り子／プロボノ

家族のように守りたい場所

大槌刺し子を知ったのは、友人でもあり、今は仕事仲間でもある加奈子さんが刺し子をしていたのがきっかけです。震災後、久しぶりに加奈子さんの自宅に遊びに行くと、テーブルの上にはまだ、縫い目が途中のかわいらしいカモメの布巾がおいてありました。「なにこれ?」って聞くと、大槌町には、私の知らぬ間に、大槌刺し子というプロジェクトができていました。よく聞くと、一枚仕上げたら、500 円という何ともびっくりする価格。単純に縫い物が好きだった私は、「稼げるかも」なんて思ったわけです。家にいながら、好きな時間に好きな縫い物をすればいいのだから。「これなら、楽に稼げる」なんて（笑）それから、大分月日も経ち、私は、このプロジェクトで働くことになりますが、パートスタッフとして先に働いていた加奈子さんが繋いでくれました。ここで働く前は、毎日、就業時間いっぱいいっぱいパソコンに向かって、ただただ決められた仕事を黙々とこなすだけ。一日の中で会話や笑うことすら少ないという悲しい日もあったりして。どちらかというと、体を動かして、日々何かしら変化があって、相手のいる仕事の方が好きな自分にとっては、耐えられなかったです。大槌刺し子でスタッフとして働いている今、静江さんという仲間に出会えました。仕事でもプライベートでも信頼できて、相談し合い、支え合える。何でもないことで一緒に笑ったり、泣いたり、悔しがったりできる仲間って、作ろうと思っても簡単じゃないですよね。そんな人に恵まれた中で仕事ができるなんてとても幸せです。笑い声があると楽しいです。刺し子さんが事務所に集まると、笑い声は何倍にもなります。年代をこえて、時にはお友達のように、時には家族のように。わたしにとって、大槌刺し子プロジェクトとは、家族のように守りたい場所です。

黒澤 かおり
岩手事務所／会計担当

2013

平成25年１月　スタッフ牧野、離任
　　スタッフ吉田、着任
　　スタッフ津野尾、着任（３ヶ月間のマネジメント支援）
１月　大槌に事務所移転
３月　スタッフ内野、着任
　　スタッフ佐々木静江、着任
３月　マルチクロス販売開始

５月　東北さくらライブツアーのグッズをコラボ制作
６月　スタッフ佐々木加奈子、着任
７月　スタッフ黒澤、着任
７月　星降るまちTシャツ販売開始

７月　Fuji Rock Festival 初出店
　　2万人の前でアピール
10月　良品計画様と共同制作した商品が、無印良品（180店舗）で販売
10月　スタッフ関、離任
11月　大槌高校での刺し子授業

人と人とのつながりへ回帰させてくれる場所

大槌町に移住し、大槌刺し子プロジェクトに携わることで、改めて自分自身が一人で生きているのではなく、大きなつながりの中で生かされているという感覚を覚えました。針を布から出し、上下し、丁寧にしごく。その繰り返しで刺し子を進めることは、古くから大切な人への愛を伝える方法であり、そのエッセンスは今も変わらず、刺し子に息づいています。刺し子さんたちは、2011年から支え、私たちの今日を作ってくださったお客さまおひとりおひとりへの感謝の気持ちと、幸せを願い、針を進める。その大切な商品を、ひとつひとつ、丁寧に発送し、その商品に込められた想いとともにお客さまに届ける。お客さまは商品に込められた温かみを感じ、笑顔になってくださる。刺し子の糸が紡ぐ人と人とのつながりが、これからも、ゆっくりでも深く、広がっていくように、大切に守って参ります。（写真／はじめて仕立てから監修し、チームの総力を注ぎ込んだ Sorakamo シリーズ）

内野 恵美
岩手事務所／大槌刺し子
プロジェクトマネージャー

やりがいを与えてくれた場所

震災後、それまで働いていた職場に戻らず、家の事をしながらプラプラと適当な毎日を過ごしていました。そんな時、刺し子の内職で縫い物をするとお金がもらえると聞き、家でゴロゴロしているだけの生活はいけないと、刺し子を始めました。少しずつ、物を作っていくうちに、縫う事がとても楽しくなってきていました。1年半くらい経った頃、事務所での仕事を手伝ってほしいと声をかけてもらい、私にも大槌の復興のためにできる事があればと、迷わずOKしました。その時、自分がやれる仕事を見つけた気がして、教えてもらった業務や梱包作業などを一生懸命覚えました。今までは、人に任せっぱなしだった生産管理や在庫管理を少しずつですが頑張っています。仕事を任されるようになってきて、自分の仕事なんだという気持ちと、仕事をしているという実感がわいてきました。この仕事をするようになってから、今までにない出会いがたくさんありました。それは、一緒に働く仲間や刺し子さんである大槌のお母さん達、刺し子がなければ出会わなかった人達です。その人達に会うとやる気が出てくるし、何かの時は助け合えるし、気の合う仲間と笑って仕事をすることができるので、とても楽しいです。仲間は大きな存在だと思っています。私にとって、大槌刺し子とは、人との出会い、自分のやるべき仕事、やりがいを与えてくれた場所です。

佐々木 加奈子
岩手事務所／
生産管理担当

刺し子さん、仲間と共に進み、新しいステージへ

岩手に着任してから 3 年になりました。ここで出会った刺し子さんの中には、刺し子が初めてだった方でも、一針一針、丁寧に思いを込めてくださっています。大槌に来てから、新しく挑戦する力や、楽しいことも辛いことも共に分かち合い進んでいく力、人が生み出す手仕事の尊さを感じています。プロジェクトは、初めての事ばかりで試行錯誤の連続ですが、それでもお客さまに励ましていただき、刺し子さん、岩手のスタッフ、東京、京都の仲間たちと乗りこえてきました。現在、内野をリーダーにプロジェクトは新しいステージに向かっています。これまで積み上げてきたものに加えて新しい仲間が増え、一年前、半年前よりも確実に前に進んでいます。刺し子を通して、お客さまや社会に、今よりもっと価値を提供していけると思います。ささやかでも、この大槌から幸せが広がっていく変化を感じています。（写真／大槌に事務所がなかった頃、体育館での刺し子会）

鈴鹿 達二郎
岩手事務所／所長

言葉では言い表せない大切なプロジェクト

このプロジェクトは、言葉では言い表せないほどたくさんのことがありました。たくさん失敗したし、回りの人達に迷惑もかけました。でも本当に成長できて、たくさんの大切な人と知り合うきっかけになりました。これまで関わってくれた方達、誰がかけてもここまで来る事はできなかったのではないかと思います。たくさんの方が力を貸してくださいました。たくさんのお客様が購入してくださいました。たくさんの仲間が応援してくれました。僕一人ではできませんでした。このプロジェクトには本当にたくさんの方々の思いが入っていると思います。力や思いをくださった皆さんの思いに報いることは、このプロジェクトをきちんと現地に根付かせることだと信じてこれからも頑張ります。引き続きよろしくお願い致します。大槌は本当に素敵な所ですので、是非お越し下さい。いつも多大なご支援ありがとうございます。心から御礼申し上げます。（写真／2011年6月16日避難所で刺し子の事務作業をしているところ）

吉野 和也
岩手事務所／スタッフ

2014

平成26年３月　Sorakamoシリーズ販売開始

６月　アミューズ様とのコラボ商品の販売開始
７月　Fuji Rock Festival 出店
７月　ポロシャツ販売開始

10月　大槌刺し子感謝祭２０１４開催

「大槌復興刺し子プロジェクト」の自立に向けて

Photo by t.koshiba

□ 内野 恵美　うちの めぐみ

上智大学比較文化学部社会学科卒。自動車メーカーにて海外販売会社のマネジメントに従事した後、国連人口基金東京事務所にて広報アシスタントの仕事をする。2013 年 3 月より大槌復興刺し子プロジェクトにて、生産・販売管理の仕組み化と業務改善、及び成長戦略の立案・実行に携わっている。

多くの人の想いが重なるプロジェクト

鬼丸　まず初めに、内野さんが大槌復興刺し子プロジェクトに参加したきっかけを教えてください。

内野　私は、２０１３年の３月から、ＮＰＯ法人 ETIC. の右腕派遣プログラムを介して、刺し子プロジェクトに入ることになりました。もともと女性の自立やソーシャルビジネスに関心があり、前職は自動車メーカーで働いていたのですが、その経験を活かして、東北の女性の自立のために何かお手伝いができないかなと考えていたときに、刺し子プロジェクトを見つけて、参加することを決めました。

鬼丸　実際に大槌復興刺し子プロジェクトに来てみて、内野さんが感じたものは何でしたか。

内野　たくさんの人が強い想いを持って運営しているプロジェクトだなということです。大槌に来る前に、２０１１年の立ち上げ当初から関わってくださっている東京のプロボノ（社会人が自らの専門知識や技能を生かして参加する社会貢献活動）スタッフの方が、壮行会みたいなものを開いてくださったんですが、皆さん、プロジェクトへの強い愛情を持っておられて、その想いを自分にも託されたという気持ちで大槌に行きました。

また、私が参加したときには、プロジェクトが始まって2年ほどたっていたのですが、スタッフと現地の刺し子さんたちの信頼関係もすごくできていました。

私自身、お役に立てるだろうかとか、いろいろ考えて入ったのですが、自分自身でいることや、目の前にいる大切な人を大事にすればいいのだと、凝り固まっていた頭がほぐされたような感じでした。

キーワードは「家族」

鬼丸　「大槌復興刺し子プロジェクト」と聞いて、内野さんが連想する言葉は何ですか。

内野　「家族」ですね。仕事だけ、お金だけの関係ではなくて、生活の根幹部分。

東京で働いているときには、同僚の家族とやりとりすることもなかったんですが、こちらでは、刺し子さんがお夕飯を持ってきてくださったり、刺し子さんやスタッフの子どもたちが学校から「ただいま!」と帰ってきてゲームをしていたり。それぞれの家族とか地域との距離がすごく近いんだと思います。

鬼丸　そういう家族的な温かさや優しさが、刺し子プロジェクトの価値として多くの人に伝えられるといいですね。

内野　そうですね。

鬼丸　単に復興支援というだけでなく、大槌復興刺し子プロジェクトが醸し出している家族的な温かさや繋がりにひかれて、商品を買ってくださったり、応援してくださっている方も多いんじゃないかと思います。

内野　私の好きなこんな風景があります。

　最近、子育て中の若いお母さんに刺し子さんとして参加していただく機会が増えていて、赤ちゃんを連れて来てくださったりすると、一気にその場が温かくなるのです。年配の刺し子さんたちが、赤ちゃんと触れ合って、とても嬉しそうな顔をされますし、3世代の交流になったりしています。若いお母さんたちも、今までは家の中で一人で子育てをしていたのが、毎週刺し子会に来るたびに、おばあちゃんが増えたとおっしゃっている方もいます。そういう目に見える形でも、地域のつながりみたいなものが広がっているのが、すごくいいなと思っています。

鬼丸　これは言い過ぎかもしれませんが、大槌町の中で刺し子プロジェクトがコミュニティの中核の一つになりつつあると感じることもできますね。

左：2013 年 4 月『鬼丸昌也と行く「大槌刺し子」と「復興」の槌（つち）音に触れる旅』での集合写真／　右：大槌の農家さんのお手伝い

「刺し子」の果たす役割

鬼丸　内野さん自身、このプロジェクトが今後の大槌町内で、大きく言えば今後の日本社会の中で果たすことのできる役割はどのようなものだと思っていますか。

内野　今、刺し子プロジェクトに関わってくださっている方たちは、震災前から外で働くことのできなかった高齢の女性や、子育て中のお母さんたちです。その方たちに仕事を提供したり、雇用をつくり出しているという意味で、震災復興にかかわらず、女性の社会参加という観点でも、日本社会の模範になれるのではないかと思っています。しかも、課題が多いとされる地方で、その問題を打破することができたら、日本社会の中でも価値のある事業になれるのではないかと考えています。

鬼丸　そのようなとき、刺し子が果たす役割、意味、価値とは何でしょうか。

内野　刺し子には、二つの観点があると思っています。

　一つは内職という形です。女性の方が、育児だったり、他の仕事などがある中でも、時間を見つけて働くことができる。

　もう一つは、手仕事で、商品自体に価値を伝えられるものだと思っています。先ほどお話した、人と人との繋がりや人の温かみなど、私たちが一番大切にしたいと思っているものを商品にして、お客様にお届けできるところが強みではないかと思います。

鬼丸　刺し子の、針と糸を使って布を縫い合わせていく作業は、ある意味、人と人を繋ぐことの象徴みたいな気がします。人のぬくもりや温かさを、手縫いは伝えることができる。

　今後、日本社会は人口が減って、それに伴って税収が減る中、いわゆる行政セクターが公のすべてを担うことは無理だと皆がわかり始めたときだと思うのです。特に地方というのは、人口減少や税収減少が著しく行われる地域だと思います。そういう地域の中で、コミュニティの中核をつくって、そこに人々が集って、力を養って、自らを支えていく。そんな風土をつくっていくことが、これから地方が自立するためには必要だと僕は考えています。

現地スタッフや刺し子さんの想いをつなぐ

鬼丸　大槌復興刺し子プロジェクトは、これから大きく変わるのですよね。

内野　はい。

鬼丸　内野さんをリーダーにして、もともとテラ・ルネッサンスが大槌復興刺し子プロジェクトの運営母体を引き受けるときに想定をしていた現地化、いわゆる別法人・独立化というものを果たしていくことになる。

　内野さんが大槌復興刺し子プロジェクトの独立後のリーダーになると決めた理由は何ですか。

内野　一番のきっかけは、現地スタッフや刺し子さんの想いですね。昨年の3月から7月にかけて、元々刺し子さんとして関わってくださっていた方3名を、パートタイムスタッフとして雇い入れたんです。その人たちの仕事に対する姿勢に人としての可能性をとても感じましたし、この人たちがこんなに大切にしている刺し子を事業化して現地に残したいと強く想って、現地の助っ人リーダーとして手を挙げることにしました。

　もう一つは、震災から3年が過ぎ、大槌の方たちの、自分たちが支援を受けるのではなく、自分たちで社会に価値を提供していきたいという気持ちを強く感じたことでした。

人生の先輩の決断に勇気づけられて

鬼丸　リーダーになると決めたことは、内野さんにとって人生の大きな決断だったでしょう。

内野　先に決めてしまってから、すごく大きなことを決めてしまったなと思ったのですが。

左：マルチクロスに刺し子をする様子／　右：大槌まつり（城山虎舞）

ただ、刺し子さんやパートタイムのスタッフたちも、大きな挑戦をされてきていると思っているんです。例えば、刺し子自体やったことがなかったけれどやってみようとか、これまでパソコンを使ったことのなかった人が、一からパソコンを勉強して、それで仕事をしようと思うのも、大きな決断だと思いました。また、東京のプロボノスタッフも、自分たちの家庭や仕事がある中で、この地域を絶対に守りたいと思って、プロジェクトをつくり上げる。それぞれの人たちの一歩が合わさって、今の刺し子事業がある。その一歩に比べたら、私の決断は小さいなと思っています。

鬼丸　刺し子さん、現地のパートタイムスタッフ、東京のプロボノスタッフの方など、内野さんからすると人生の先輩に当たる人たちの決断やチャレンジの積み重ねに勇気づけられて、決断することができたという感じなのでしょうね。

主体性を持って運営する

鬼丸　今後、独立するに当たって、もしくは独立して以降の刺し子プロジェクトの課題は何だと思いますか。

内野　課題は無数にある中で、大きなところを二つ挙げるとすれば、一つは、人と人を繋ぐものとしての刺し子の価値をどう商品に落とし込んでいくか、どうしたら私たちの伝えたいことを届けられるのかということです。

もう一つは、現地のスタッフや刺し子さんたちに、どう主体的に事業に関わってもらうかということです。お客様と刺し子さんの距離が近くなればなるほど、このプロジェクトの魅力や価値が増えていくのではないかと思っています。そういう意味で、刺し子さんやスタッフをどれくらい巻き込んでいけるかは、私自身もそうだし、事業としての課題でもあると思っています。

鬼丸　ウガンダやカンボジアなど、テラ・ルネッサンスが活動している他の事業地でもそうですが、いかに現場で主体性を持って進めていくかは、大事な視点だと思います。

大槌刺し子の新たなる挑戦

鬼丸　今回、別法人化を果たすことによって、大槌刺し子は新たなブランドとして立ち上がることになります。

新しい組織のリーダーとして、内野さんが実現したいビジョンを聞かせてもらえますか。

内野　刺し子の事業を通じて、地元の女性たちが生き生きと働いて集う場所をつくりたいと思っています。自分自身でブランドをつくり上げ、運営していることは、大槌

Photo by t.koshiba

Photo by t.koshiba

の方たちの町の誇りを取り戻すことにつながりますし、関わってくださっている方たちが、自分たち自身の可能性を見ることができる場所でありたいと思っています。

また、私たちの取り組みを通じて、お客様や支援してくださる方たちも、他人事ではなく自分の問題として、一緒に社会問題に取り組んでいく。そんな事業になりたいと思っています。

鬼丸　テラ・ルネッサンスでは、どの地域で事業を行うときにも、自立と自治を促進することを常に念頭に置いてきました。その地域の問題は、その地域の人たち自身で解決することが一番良くて、そのお手伝いをするのが支援だと思ってきたのです。

内野さんや現地のスタッフは、これからさらに困難な道を歩むことになると思いますが、果たすべき役割をきちんと果たしてもらって、大槌町の、もしくは日本の一つの希望に、この大槌刺し子がなってくれればいいなと感じています。

大槌復興刺し子プロジェクトの現地化、そして永続的な発展を目指して、一緒に頑張っていきましょう。

株式会社 坂ノ途中 × 認定ＮＰＯ法人 テラ・ルネッサンス　特別対談

企業から見えてくる自立支援の価値

□ 宮下芙美子 みやした ふみこ

株式会社坂ノ途中海外事業担当、ウガンダ現地法人 Saka no Tochu East Africa 代表。1988年石川県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科卒。大学時代の専門は文化人類学、アフリカ地域研究。2011 年に株式会社 坂ノ途中に入社、東日本大震災・福島第一原発事故で被災した有機農家の移転支援事業『ハローファームプロジェクト』を立ち上げる。2012 年より、ウガンダで持続可能な農業を普及する『ウガンダオーガニックプロジェクト』を始動。ウガンダの有機農産物の日本への輸出や、現地での有機野菜の生産・流通・販売事業を行っている。

左：ゴマの種まき作業の様子／ 右：収穫したゴマを手に誇らしげな農家さん

インタビュアー／北詩織（テラ・ルネッサンス インターン）　文章／牧野由起子

「百年先も続く、農業を。」

北　まず初めに、坂ノ途中さんの設立の経緯、事業について聞かせてください。

宮下　坂ノ途中は２００９年に創業した会社で、「未来からの前借り、やめましょう」「百年先も続く農業を」というメッセージを掲げて、ビジネスを通して農業の持続可能性にアプローチしています。

　農薬や化学肥料に頼る、いわゆる慣行農法を行うと、一時的に収穫量が増え、人間がコントロールしやすい形になるのですが、その代償として、土がやせ、水が汚れ、次の世代に残らないという問題があります。それを我々は「未来からの前借り」と表現し、それをやめましょう、豊かな土を残していけるような農業をしましょうというメッセージを掲げて活動しています。

　今、日本国内では主に野菜を扱っています。特に有機農業に取り組む若い農家さん、新しく農業を一から始めた方とパートナーになって、その農家さんたちがつくった野菜を私たちが買い取り、お客さんに販売しています。我々がそうして支えることで、有機農業をやりたい人が後から後から出てきて、結果的に農業全体の中で環境負荷の小さい農業が多数派である社会を目標にしています。

北　ウガンダ事業のこともお願いします。

宮下　いわゆる途上国、特にアフリカは、農薬や化学肥料を扱う企業にとって、「最後の市場」と思われている節もあり、実際に農薬や化学肥料が今まさに広まりつつあります。つまり、途上国でこそ「未来からの前借り」が進んでいっているのが現状です。それをどうにか食い止めたい、日本だけではなく、地球全体の問題として、農業の環境負荷を小さくしていきたいという思いを、創業当初から温めていたんです。代表の小野がバックパッカー経験者だったり、途上国への思い入れが強いスタッフが多かったのもあって、いずれは途上国でも事業を展開したいと考えていました。

北　テラルネとの出会いのきっかけは何だったんでしょうか。

宮下　テラルネさんのことは前々から存じ上げていて、お話してみたいと思っていたんですが、鬼丸さんが何かの拍子に訪ねてきてくださったのがきっかけでした。私自身はその時ちょうどウガンダに行っていてお会いできなかったんですが。うちの代表と話していただいて、フィーリングが合い、「何か一緒にやれたらいいね」とお話ししていたところ、ついに実現することになりました。

売れる作物をつくる

北　事業地としてウガンダを選ばれた理由を教えてください。

宮下　私は大学で文化人類学を専攻して、アフリカを対象に研究していたので、いずれアフリカに戻って何かしたいと思っていました。その願いが叶って会社としてアフリカで有機農業の普及活動をすることが決まったのですが、アフリカの中でもウガンダになったのは、ほとんど偶然ですね。

北　ウガンダではどのような事業をされているのでしょうか。

宮下　２０１２年に、ゴマを現地でつくって、日本に輸入する事業を始めました。

　なぜゴマなのかというと、ゴマは

村全体が集まるゴマ生産についての会議

途上国向き、特にアフリカ向きな特徴があるためです。農薬や化学肥料に頼らなくても育てやすいですし、乾燥に強く、やせた土地でも頑張って育ってくれるという性質があって、かつ栽培自体はそれほど難しいわけではない。それに、ゴマは収穫した後、選別する作業にすごく人手がかかるので、人件費の安い途上国の方が有利なんです。

北　ウガンダの農作物として、メイズという白いトウモロコシがありますが、そういったものに手を出そうとは考えられなかったのですか。

宮下　事業として始めるにあたって、つくったものがきちんと売れるということがすごく大事でした。農家さんがつくったものを、私たちが繋ぎ手となって、お客さんに売るわけですから、そういうビジネスがしやすいという点でもゴマは理想的でした。

日本ではゴマをよく食べますよね。油としても使うし、煎りゴマ、すりゴマの形でも使う。ものすごい量のゴマを消費しているのですが、その大半を輸入しているのです。

それは別に何も悪いことではなくて、理に適ったことなんです。先ほども言いましたが、ゴマは乾燥した気候を好みます。日本は湿潤ですから、そもそも気候的に合っているわけではない。かつ人件費も高いから、国産でゴマをつくると、とんでもない値段になってしまう。それよりは、乾燥しているところでつくって持ってきた方がよっぽど合理的、かつ条件の合わないところで無理やりつくるより環境負荷も小さいんです。我々はこういう考えを「適地適作」と呼んでいます。

そういった観点から、アフリカでのゴマ栽培は理想的であり、どうせ輸入するなら、安く買い叩くのではなく、お互いの顔が見える関係で、ゴマを通してつながりたいという理想を持っていました。

ありがたいことに、京都市の桂にあるゴマ製品メーカーの山田製油さんに「こういうことがしたいんです」とお話したら、すごく共感してくださって、「そんなことできるんやったら、全部うちで買うたるで！」と言ってくださったので、最初から売り先が決まっている状態で生産を始められました。

産地でも食べられるものを

宮下　途上国で「農業技術支援」を行っている団体は、NPO、NGOなどたくさんあります。作物の栽培方法を指導して、一緒に汗をかいて…というのはすごくわかりやすいですよね。多くの場合、作物が「できた！」という時点で、支援プロジェクトが成功と見なされるのですが、そこから始まる問題もあるんです。

ウガンダの農村で農家さんと話をしているとよく耳にするエピソードがあります。今まで、いろいろな外国人が来て、現地のマーケットで売れないものや自分たちで食べないものを、「つくるといいよ」と勧め、栽培を指導して、つくるようになった。ところが、その団体がいつの間にかいなくなって、二度と戻ってこない。結局、自分たちの生活が改善するでもなく、収入が向上するでもなく、途方に暮れる――これが、すごくよくある話なんです。

我々も、もちろんビジネスですから、ゴマを農家さんから買って、それをお客さんに売る過程で利益を得ています。そうして得た利益をプロジェクトの次のシーズンに投資する。そうやってどんどん拡大していく形を目指しています。だから農家さん

右上：作付の計画から一人一人と話し合う
左：子どものいる女性も多数活躍している

から責任持って「買う」こと、それが「売れる」ことがとても重要です。穀物のトウモロコシを日本に輸出して売るというのはちょっと難しそうですが、ゴマだったら確実に需要がありますよね。

北　ゴマはウガンダでもよく食べられていますよね。

宮下　テラルネさんの活動している北部地域だと、シムシムボールというお菓子にしたり、カロという日本のお餅かお饅頭のような主食にゴマのソースをつけて食べたり、ふだんからよく口にしていますよね。

一方で、高品質なゴマで有名な南米などの産地の畑を見に行って話を聞いても、ゴマ農家さんたちが全然ゴマを食べていないんですよ。ゴマに限らず、プランテーションの名残や、国際市場で需要があるからといった理由で、自分たちが食べないものをつくっている産地はたくさんあるんです。それはもちろん悪いことではないのですが、せっかく一生懸命つくったものなら、「自分たちも食べているよ、おいしいよ！」と送り出してほしいですよね。ゴマとウガンダの関係は、そういう意味では気持ちがいいですね。

持続可能な自立支援を目指す

宮下　ウガンダにもいろいろなNGOとかNPO、援助団体がある中で、テラルネさんってすごくおもしろいと思うんです。一つは、長く活動されているということ、それ自体がやっぱりすごいなと思っています。

現地で見ていると、長く続かない活動もたくさんあるんです。プロジェクトを立ち上げて現地の人と一緒にやってきたけれども、あるとき予算が尽きてしまって、プロジェクトが終わって、一緒に取り組んでいた農家さんたちが取り残されるとか。

我々は、環境的な側面で持続可能性をうたっていますが、経済的にも持続可能な、かつ取り組みが拡大するような形を常に目指しています。テラルネさんが何年も活動されて、卒業生をどんどん輩出して、地域に影響を与えている様子を見ると、すごいなと思いますね。先輩として本当に尊敬しています。

北　持続するということはすごく大変ですね。

宮下　さまざまな活動が、寄付が集めやすいとか、国から援助が出ているとか、ハードルが低いタイミングをとらえて勢いよく始まりますが、活動していると、難しい局面が幾つも幾つも訪れます。それを克服して続けていくためには、体力が必要だし、戦略、計画を立てるのも大事です。だけど、どれだけ計画を立てていても、予想外のことが起きてしまうものです。そうなったときに乗り越えるには、責任感や「気迫」みたいなものが問われると思います。鬼丸さんや小川さんと話していると、そういう「気迫」をすごく感じますね。

上：キャンプからの帰還が進む村とシアの樹／ 左：女性たちが拾い選別したシアの実
右：完成した製品「SHEA BUTTER NILOTICA」お買い求めはテラ・ルネッサンス事務局まで。 Tel 075-741-8786 E-mail contact@terra-r.jp

「何が何でもやり抜いてやるぞ」みたいな。

北　お話を聞いていて、坂ノ途中さんとテラルネには、自立支援を目指すという共通の強い意志を感じました。あわせて、一面的な物の見方だけではなくて、自分たちの影響力を考えながら活動していることも共通点だろうと思いました。

不均衡な関係から対等な関係へ

宮下　「自立」というのは、すごく大事なことだと思うのです。

坂ノ途中ではウガンダのプロジェクトの開始以前に一年間、「ハローファームプロジェクト」という、東日本大震災と福島第一原発事故で被災された農家さんの支援事業を行っていました。

このプロジェクトでは、自分たちがそれまでやってきた土地で農業を続けるのが難しくなった農家さんが、京都に移転して農業を続けられるよう、土地探しなどの支援をしていました。新しい土地でできた野菜を坂ノ途中が買い取るところまで含めて、継続的な関係でサポートできるようにするというものでした。

そのほか、私は個人的に被災された方の支援事業にかかわっていた時期もあるんですが、そうした活動を通して強く感じたのは、「支援する側」、「される側」の関係というのは、圧倒的に不均衡だということです。こちらがそういうふうに思っていなくても、何かを与えるという立場はつい態度が大きくなってしまうし、何かを受け取っている立場は気持ちも弱くなってしまって、お互いそこから抜け出せなくなってしまう。その息苦しさみたいなものにとらわれてしまって、何とかできないものかということを常々考えていました。「支援」とか「援助」という言葉には、そういう不均衡な関係が常に内在していると思っています。

坂ノ途中が行った被災された農家さんの移転支援事業では、ある時点で、被災された農家さんが被災者を「卒業」する瞬間を迎えます。京都の一農家さんとして野菜を育てて、坂ノ途中がそれを買う、その時点で対等なパートナーになれるんです。そのことがすごく気を楽にしてくれて、やりぬくことができました。

ウガンダに関しては、現時点では我々が一方的に与えている部分が大きいのですが、近い将来、対等なビジネスパートナーとして、農家さんたちは高品質の商品を提供し、坂ノ途中はそれに正当な対価を払うという関係に早くなりたいと思いながらやっています。

北　支援した先のことも考えて活動していくことが大事だということですね。

ゴマ油、ゴマクッキー、シアバター

北　今回のコラボ商品について教えてください。

宮下　山田製油さんから、ウガンダ産ゴマ100％のゴマ油や練りゴマが登場する予定です。山田製油さんは非常に品質に厳しいので、産地によって異なるゴマの特徴もチェックしてくださいます。現在、ウガンダのゴマはどういう加工が向いているのか、いろいろ試してもらっている最中です。必ず、ウガンダのゴマにとって一番良い商品にしてもらえると思います。

それから、滋賀県のがんばカンパニーさんという作業施設で、ゴマをふんだんに使ったクッキーなどのお菓子も開発していただいています。

北　ゴマ以外には、シアバターもありますよね。

宮下　シアバターは、テラルネさんの活動しているウガンダ北部に自生しているシアの樹の実からとったオイルです。シアの樹は家の周りなどに生えていて、樹齢20年くらいから実をつけます。現地でも、オイルを肌に塗ったり、料理に使ったりしています。

シアの樹は、家族の樹としてその地域でとても大事にされています。シアの実を届けてくれるおばさんたちから、内戦中、村を離れて避難民キャンプにいた時にも、いつLRA（神の抵抗軍：ウガンダの武装勢力のこと）が来るかわからないのに、兵士を護衛につけて、シアの実を拾うためだけに村に戻ってきていたというエピソードを聞いたことがあります。

今、シアバターの産地であるウガンダ北部では、避難民キャンプに逃れていた人たちの元いた村への帰還が進んでいます。けれど、せっかく帰っても、ずっと留守にしていた村なので、畑も荒れ果てているし、家畜は死んでしまったり略奪されていたりで、生活を復活させるのはすごく大変なんです。そうした中で、シアの樹は変わらずそこに生えていて、自分たちで使うだけでなく、現金にかわる収入源になり、地域の復興に大きく貢献しています。

これからの農業を考える人を育てる

北　今後、テラルネと一緒に達成したいことはありますか。

宮下　日本でも同じ京都が拠点ですし、同じウガンダで活動していて、かつ年代も近くて、鬼丸さんや小川さんとお話していても深く共感しあえるので、本当にいろいろな可能性があると思っています。

我々がつくった商品をテラルネさんで販売して、売上を活動資金に充てていただけるという現在のコラボレーションも嬉しいのですが、いずれはもっと直接的に、実際の活動の面で繋がりができたらもっと嬉しいなと思っています。

例えば、ウガンダ北部のグルにあるスマイルハウス（テラルネの元子ども兵社会復帰支援センター）の就労訓練のプログラムに「農業」があってもいいんじゃないかと思っています。

ウガンダ全体に言えることですが、伝統的に取り組んできた素朴な農業を発展させ、持続可能性に配慮し、できたものをどうやって売っていくかという販売面も含めて考えられる人材を育てることはこれからの重要な課題です。坂ノ途中としても、ウガンダで農業に関わる活動をするなら、農業や環境にかかわる教育や人材育成の面を強化していきたいという思いがあります。テラルネさんが培ってきた、人の可能性を伸ばして生きる力を育てるノウハウや今までの経験を共有していただき、何らかの形で一緒に取り組めたらいいなと思っています。

北　とてもおもしろいですね。私は今年の夏にウガンダに行きまして、現地でスマイルハウスのスタッフの方にお話を聞く機会があったんですが、給食をつくっている方が料理教室をやりたいとおっしゃっていました。坂ノ途中さんのプログラムでできた野菜でスマイルハウスの給食をつくったり、料理教室ができるようになると、楽しいですね。本日はどうもありがとうございました。

左側、坂ノ途中の宮下さん。右側、テラ・ルネッサンスの北。

アジア事業編

「自立と自治」の大切さ

議論なきところに民主主義なし

これまで支援してきたカンボジアの地雷埋設地域の村では、村人たちが自分たちの意見を言う『場』がなかったり、非常に少ないことに気がつきました。その代わり、村人たちの不平や不満、政府の批判などは、よく耳にしました。残念ながら不平や不満を言っても何も変わりませんし、現在の政府の批判を村の中で言っていたところで、辺鄙な村に対して政府が何かしてくれることも期待できません。自分たちの村、コミュニティの問題は、そのコミュニティの中で話し合い、議論し、問題を解決していかなければならないのです。『議論なきところに民主主義なし』。日常的に顔を合わせ、お互いを知っている範囲でのコミュニティが、最も一人ひとりが意思決定に参加しやすく、一人ひとりの意見が反映されやすいと思っています。そして、このことは他人任せや政治家任せ、国際機関や、援助機関任せにして他者へ依存するのではなく、一人ひとりの村人たちが主体性を発揮することにつながり、それが最終的には根本的な問題の解決へとつながると信じています。他人任せにするのではなく、主体性と自らの責任で村をつくっていくのが『自立』と『自治』であり、その基となるのが議論（話し合い）だと思います。誰もが持つ未来をつくる力を引き出す議論の『場』を用意するのが、私たちの役目だと思っています。

ロカブッス村で９月に裁縫技術訓練が修了し、お店を開いたチャン・トーンさん

□ 江角 泰　えずみ たい

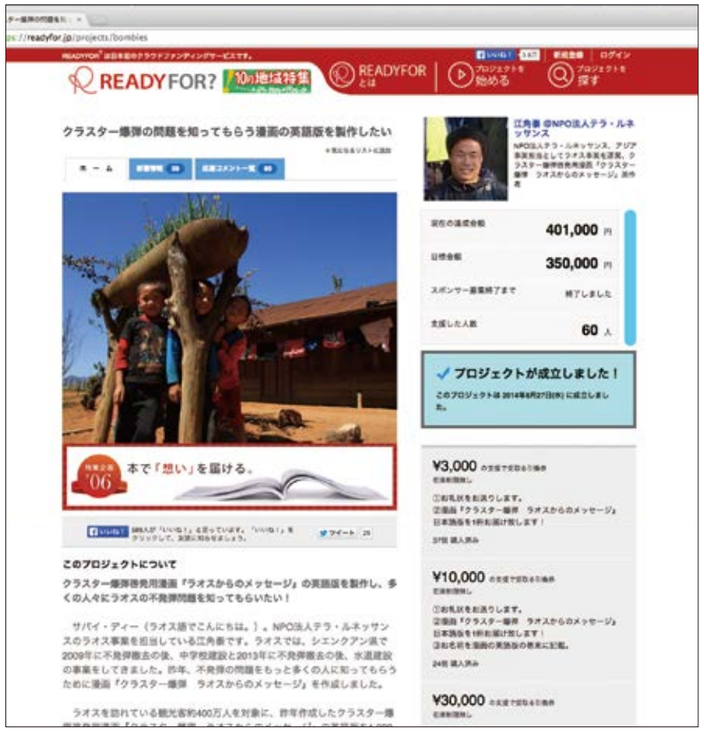
大学在学中、テラ・ルネッサンスのカンボジア・スタディツアーに参加。京都で大学院に通いながら、２年間テラ・ルネッサンスでインターンを経験。2006年に職員となり、2008年よりカンボジアに駐在。カンボジア及びラオス事業の運営に携わる。カンボジア駐在代表。

村のミーティングに集まってくる村人達

一人ひとりの村人たちの〝チカラ〟を引き出す

２０１１年から村落開発プロジェクトを開始したロカブッス村では、「自治」を目指した毎月のミーティングを開催しています。話し合う内容は、村の灌漑設備の管理方法や、栽培した作物の販売方法、手洗いの講習会の開催など様々です。ミーティングを始めた最初の頃は、参加者も少なく、村人たちの意識も低いものでしたが、村人たちから文字が読めない人たちへの文字の読み書きを教える提案が出る等、最近は、村人た

日本語版「クラスター爆弾　ラオスからのメッセージ」



目標金額を上回るご支援をいただきプロジェクトが成立。現在英語版冊子を制作中。

灌漑設備のポンプの管理方法に関して話し合うロカブッス村の村人達

ちの主体性が見られるようになってきました。まだまだ発展途上ですが、村人たちが自分たちでミーティングをやり、自分たちの問題を解決できるように話し合えるようになれば、私たちの支援ももう潮時になったと思える頃になるでしょう。全員参加、村人たち一人ひとりが主人公の村づくりです。

２０１４年、ロカブッス村に住む地雷被害者スー・マウさんへ「自立」支援を始めています。マウさんは、２００３年、村の川の堤防で地雷を見つけ、地雷の中の火薬を使って魚を獲ろうと地中から引き上げたら、突然爆発し、右手を失くしました。地雷被害に遭ったあと、奥さんにも逃げられ、２人の幼い男の子を一人で育てることになりました。テラ・ルネッサンスでは、自立支援の前に、まず雨漏りしていた家を修理し、最低限の生活ができるようにしました。その上で、昆虫をとるための道具と子牛２頭を提供しました。これは脆弱な農村での生活の中で、複数の収入源を確保することで、安定した生活を確保するためにマウさんと一緒に立てた計画です。自分で稼いでいくチャンスは、日雇い労働しかないと思っていたマウさんは、涙を浮かべていました。これによって、右手が使えないマウさんでも、自助努力によってお金を少しずつ稼ぐことができるようになっているところです。地雷被害者でも機会がきちんと提供されれば、自分で努力して、自立した生活を送る力を持っています。今まで、そのチャンスすらもないほどの貧困に苦しんできただけなのです。もうすぐ始まる新学期から子どもたちを学校へ通わせたいとマウさん。また、家を修理したときには、村の年配の方たちが、頼んでもいないのに手伝ってくれました。「結いの心」がまだ村人たちに残っていることが、本当に嬉しいことでした。

子ども達を学校へ通わせたいと話す自立支援を喜ぶマウさん

新たな時流を作り出す本をみんなの手で

今年初めてインターネットを利用して、不特定多数の人から資金を集める方法（クラウド・ファンディング）の一つである『READYFOR?』で、漫画冊子「クラスター爆弾　ラオスからのメッセージ」の英語版製作費を集めました。結果は、多くの皆様にご支援いただき、目標金額を達成することができました。この『READYFOR?』での挑戦は、今も紛争で使用され、被害者のほとんどが一般市民であるクラスター爆弾の根本的な問題解決のためには、日本の多くの市民の皆様に真実を知ってもらう必要があるとの想いからでした。使われれば被害に遭うのは私たちと同じ一般市民。絶対無理だと言われていたクラスター爆弾禁止条約が成立したように、私たち一般市民が関心を持ち、事実を知り、声をあげることで世界を変えられます。どんな未来を作るのか？それは今を生きている私たちが、選択することができるのです。この漫画の英語版、そしてラオス語版を製作し、世界中の人たちにラオスの不発弾問題を知ってもらうとともに、不発弾の被害を受けている人たちへの支援をさらに拡大していきます。

— クラウドファンディングを利用した資金調達 —

僕らの愛が集まった60日間

文章／依田匡史 ●龍谷大学 2 回生。2014年春に行われたカンボジアスタディツアーに参加。帰国後、インターンを開始。広報チームに所属し、SNSを活用した情報発信を担っている。

私がテラ・ルネッサンスでインターンをするきっかけとなった、カンボジアスタディーツアー。あの国で見たもの感じたものは今でも私の心を動かしています。

真っ直ぐで素敵な笑顔の人たち、それと反対で地雷に怯え地雷に苦しむ人たち、地雷によっていつ人生がめちゃくちゃになるのかわからない世界を知り、自分に劣等感を感じ、なぜ世界は不平等なのかずっと答えを探しています。こんな小さな私があの人々に、あの世界へ何が出来るのか…。

今もわからないことばかりですが、一つ言えることは私の国際協力はここから始まったということです。

2014年7月～8月にテラ・ルネッサンスでは初めての取り組みとなる、クラウドファンディングを行いました。カンボジア駐在員江角が中心となり、ラオスのクラスター爆弾の啓発を目的として作成した漫画「ラオスからのメッセージ」の英語版を作り、世界の人へ啓発をしていきたいというプロジェクトです。そこで、英語版に翻訳し、製本するための資金調達を行いました。

目標金額を設定しウェブサイトで賛同してくださる支援者の方を集めるというものです。テラ・ルネッサンスではクラウドファンディング自体が初めての試みで、担当の江角やインターン生の岡田が協力しプロジェクト開始前から研究を重ねました。

私はこのプロジェクトを通して気付き、感じたことがあります。一つは、私たちの想いを伝え、関心を集める大切さと難しさです。活動のきっかけや活動に対する想い、そしてこの活動の先にどのような変化があるのか。私たちが何のために資金を集めているのか、理解してもらい共感してもらうことの難しさと大変さを実感しました。

もう一つは、資金集めでは無く一人ひとりの愛や想いを集める60日間だったということです。私の中で今回のプロジェクトは、ただの資金集め、ではありませんでした。ご支援ご支持してくださった皆さんに共通して、温かい気持ちと世界を想う愛があったと感じました。この愛が集まるように、ただお願いをするのではなく、それよりも先に、「どうラオスの現状（ラオスの方の声）を伝えるか、記事の最初の三行でどれだけ関心を集められるか。」私はここを大切にして広報をし続けました。60日間で、本当に多くの愛が集まりました。

私は間近で一人ひとりの想いや愛が積み重なり、世界を変える力になる瞬間を見ることができました。

一人ひとりが集まる本当の強さを今、実感しています。

— クラウドファンディングを利用した資金調達 —

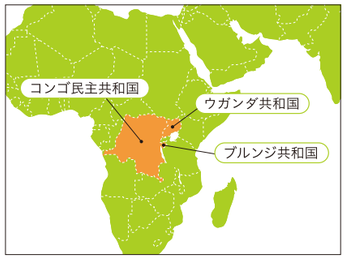
初の試みから学んだ多くのこと

文章／岡田実沙季 ●立命館大学3回生。2013年10月よりテラ・ルネッサンスにてインターンを開始。広報、テラカフェ等のイベント運営を中心に担当。開発学に関心を持つ。

2013年夏、他団体のインターンシップ制度を利用しカンボジアのNGOで働いたこと、それがテラ・ルネッサンスでのインターンを考える契機となりました。各プロジェクトに関する書類作成等が中心だった海外事務所に対して、NGOの本部ではどんな業務が行われているのだろう、そんな疑問や好奇心が湧いてきたのです。そして、実際にテラ・ルネッサンスでインターンを開始して実感したことがあります。海外で行われているすべてのプロジェクトは、国内で資金調達のため日々働いているスタッフ、そして支援者の皆様なしでは成り立たないということです。国内での講演活動、イベントの開催、フェイスブックを始めとするSNSでの広報活動、こういったものが海外の業務を支えている、それを強く感じるとともに、私自身も力になりたいと思いました。

2014年7月～8月に行ったクラウドファンディングは、テラ・ルネッサンスにとって初めての取り組みでした。クラウドファンディングは、SNSの活用が大きな鍵を握っている点で、その他の資金調達とは大きく異なります。SNSを利用することで、テラ・ルネッサンスの存在を知らない不特定多数の人々に関心を持ってもらう可能性が高くなります。クラウドファンディングの戦略を練ることは、初めてのことも多く簡単ではなかったものの、テラ・ルネッサンス組織全体にとって有益だったように思います。SNSを活用した広報活動が改善、向上の余地のあったテラ・ルネッサンスにとって、いかに現状を伝え、私たちの思いを伝えるかを試行錯誤し工夫を重ねる経験は、組織全体のパワーアップにつながりました。

また、このプロジェクトは、私個人にとっても大切な経験となりました。インターネットを介した広報活動は、文章とともに写真や映像を添付することはできますが、直接会って話すことに比べれば、伝えられる情報や思いは少ないと感じていました。しかし、今回のプロジェクトを通して、フェイスブックの一つひとつの投稿を工夫し、試行錯誤を重ねたことで、文章でも人に思いを伝えることは可能であり、伝え方も無数にあるのだと実感しました。また、このプロジェクトを通して、支援者の皆様のあたたかさを何度も感じられました。自分が書いた文章に対してシェアやコメント、ご寄付を通して支援くださる皆さまからの思いが、私たちスタッフの心の支えとなり、励みでした。ご支援くださった皆様、心の中で応援してくださったすべての皆様に、心より感謝申し上げます。



アフリカ事業編

「自立と自治」の大切さ

アフリカの援助が失敗したのは、アフリカの責任？

過去50年間、欧米諸国はアフリカに230兆円もの援助を行ってきました。この金額は、6千年前の縄文時代から、毎日、1億円を使い続けても、使いきれないほどの金額です。しかし、アフリカの問題は一向に解決されておらず、それどころか、これらの莫大な援助マネーが独裁政権を支えたり、紛争を助長したり、国内の格差を拡大する一因になっています。この50年間、欧米諸国（援助する側）の考えた「援助の方法」がうまくいかないと、その都度、原因は援助を受ける側にあるとして、その失敗をアフリカに押し付けてきました。

そして、今もアフリカの多くの国は援助に依存しなければ、国家を運営できない状況が続いています。そろそろ、援助する側の一方的な論理を見直して、アフリカの「自立と自治」を真剣に考えていく必要があると思います。

あらゆるものが相互に依存している今の世界で、他国に全く依存しない国を作ることはできません。しかし、今のアフリカ諸国のように極端に先進国（特に欧米諸国）に依存した状態では、自国の人々の暮らしを守るのに大きなリスクを伴います。輸出している資源や原料が先進国から買ってもらえなくなれば、国の経済は立ち行かなくなりますし、それは大多数の貧しい国民の生活をさらに苦しめます。

「援助する側に依存しない」アフリカの国作りを支援すること

貧しいアフリカ諸国は、国家予算の3割～5割近くをも外国（主に欧米諸国）に依存しているので、国の指導者たちは、「国民の顔」ではなく、欧米人の顔色を伺いながら国を治めなければなりません。国を運営するために必要なお金（税金）を納める力のない国民ではなく、外部から多額の資金を援助してくれる外国人の言うことに耳を傾けざるを得ないということです。つまり、自分たちの国のことを自分たちで決めること（自治）が簡単にはできない現実があるのです。

□ 小川 真吾　おがわ しんご

大学卒業後、青年海外協力隊員としてハンガリーに派遣、旧ユーゴ諸国とのスポーツを通した平和親善活動などに取り組む。帰国後、カナダ留学などを経て 2005 年より、テラ・ルネッサンス、ウガンダ駐在代表。ウガンダ及びコンゴ民主共和国における元子ども兵の社会復帰支援事業などに従事し、2011 年テラ・ルネッサンス理事長に就任。

上：ウガンダ北部の戦闘から帰還後、家族とともに農業に取り組む元少女兵
下：地元の村が襲撃されて、隣り村に避難している家族（コンゴ民主共和国）

溶接技術を身につけて自立したコンゴ民主共和国の元子ども兵たち。地元の病院から注文を受けてドア枠を製作している様子。

飢餓や貧困、紛争によって傷ついた人々に対して援助をすることは、もちろん重要ですが、長期的には、このような状況に陥らないようにしていくことが重要です。飢餓や紛争が発生するリスクを抑えなければ、いつまでたってもアフリカの人々は安心して生活することができません。

長期的に必要な援助は、アフリカの「自立と自治」を促進する支援です。アフリカ人が自分たちの力で国民を養い、自分たちの意思で国を治められるような「国作り」を支援するということです。老子の言葉に「魚ではなく、魚の釣り方を教えるべきだ」という教えがありますが、これは、魚（援助）を与えても食べてしまえば、また同じ状況に陥るので、持続的に生きていく為に必要な魚の釣り方（技術や能力）を与えることが大切だという教えです。援助される側のことを第一に考えるならば、わたしたちは、「援助する側に依存しない」アフリカの国作りをお手伝いしなければいけないということです。

どれだけ傷ついても、誰もが「自立と自治」を促進する力を持っている

先進国の私たちは、アフリカの人々の欠如しているところばかりに目を向けることがあります。貧しさを克服できないのは、アフリカの人々の能力や努力が欠如しているからだと考えたり、紛争を引き起こしたアフリカ人には平和を作る力がないのではと考えたりすることもあります。そうした理由で、アフリカ人は、問題を解決する能力は乏しいと決め付け、先進国側が準備した解決策を与えようとします。

私も、10年前にウガンダで元子ども兵と初めて出会った時は、紛争で身も心も傷つき、小学校も行ったことがなく、一般社会で働く術がない元子ども兵が自立していくことは本当に可能なのだろうかを思ったこともありました。当時は、人口の9割が国内避難民で、日々、約150人もの人々が紛争の影響で死亡している状況でしたので、私の周囲でも、このような状況で、住民以上に多くの課題を抱えている元子ども兵の自立は困難だと指摘する人もいました。しかし、当時の元子ども兵らは全員、3年間の自立支援を経て、地域住民の平均以上の所得を得ることが出来るようになっています。また、近隣住民から差別や偏見を受けることが多かった元子ども兵らが、今では地域の最貧困層住民を支援したり、村の役職に就いたり、選挙に出馬しているケースもあります。彼ら彼女らの歩みを観てきて思うことは、どれだけ傷ついていたとしても、自立と自治を促進することは可能だということです。そして、自立と自治を促進する為には、援助する側から知識や技術を与えるだけでは不十分で、一人ひとりがその知識と技術を使って、自発的に解決策を試行錯誤しながら考えるプロセスが重要であるということでした。

左：ブルンジに完成した、自立支援センターの開所式に集まった地元の人たち
右：紛争下で自立に向けて、当会の施設で洋裁の訓練を受ける紛争被害者（コンゴ東部 南キブ州）

自立と自治を促進する大切さは国内の取り組みでも同じ

アフリカでの自立と自治を促進する支援の経験は、国内での職員やインターン生への人材育成にも活かされています。例えば、職員だけでなくインターン生に対しても、一つのまとまった仕事に「責任と権限」を持ってもらい、限られた期限内で、目標を達成するように少々厳しいタスクを課すことがあります。その際、目的や目標はある程度、こちらで決定しますが、それを達成する為の方法論やプロセスをすべて1から10まで教えることは通常ありません。1から5くらいまでは指導しますが、あとは、自分の頭で考えて、プロジェクトなり活動を推進していくようにお願いしています。短期的に見れば、すべてを教えたほうが効率も、仕事の質（成果）も高くなるかもしれませんが、長期的には、自分の頭で考えて、成果やそれを図る指標の設定などを本人（またはチーム）で試行錯誤しながら考えてもらうほうが人材育成になると考えています。どんな小さな作業や活動、またはプロジェクトでも、人任せではなく、主体的に取り組んでもらうことがオーナーシップを高める上でも重要ですし、こちら側がきちっと権限を渡すことができれば、本人も与えられた仕事に責任を持って取り組んでくれます。その結果、こちらが想定している以上の成果を出してくれることも少なくありません。

今年の夏も、ウガンダでインターン生の視察・研修を実施しました。参加した2名に対しては、基本的な調査目的や手法、注意事項については説明しましたが、自分たちで工夫しながら元子ども兵への聞き取り調査を進めてもらいました。

これまでの、海外での事業を通して、私たちは、自立と自治を促進していくことの大切さは、国内での取り組み（岩手の大槌復興刺し子プロジェクト）や、組織内部の人材育成においても同様であると明確に理解することができるようになりました。

これからも、アフリカの人々が、自らの力で様々なリスクに適応して、自立して生活できることを願って、そして、自らの意思で、国や地域、村のことを決定する力（責任と権限）を地元の人々が持つことができることを願って、自立と自治を促進していきたいと思います。

— インターン生が見たウガンダ —

自立が生み出すもの

私は今年の6月からインターンを始めました。業務は助成金とボランティアさんの調整です。今回のウガンダ視察が私の海外デビューとなりました。

現状として、途上国には多数の国や様々な援助組織が入り経済発展のための支援を行っています。しかし、その支援の仕方は住民のニーズに合っていない一方的な支援となっています。それは経済発展ばかりに重点を置いており自立支援とはかけ離れたものでした。国全体の自立という本当の意味での繁栄は出来ず、支援に頼りきったものとなってしまいます。支援が当たり前になってしまったら、自分たちの力で努力するという気持ちもなくなってしまいます。支援してくれるから、ただ乗っかるのではなく、その支援から自分たちで何かを見つけ次のステップに繋げていくことが大事なのだと思います。元子ども兵の自宅に伺い、現状調査をさせていただきました。そこでは、みな自分で収入を得て生活基盤を築くことに誇りを持っておられました。援助団体の支援を上手く使い自分の力で成功するような人材を生み出すことが今後援助団体のすべきことだと思います。そこからリーダー的人材を創出し、国をまとめ上げるような芯の強い人材が多く創出されるようになればウガンダ情勢も何か変わるのではないかと思いました。

受益者の方々に日舞を披露しました。

文章／北詩織 ●大学の授業で設立者の話を聞き国際協力に関心を抱く。ボランティアから始め、2014年6月からインターン開始。今夏ウガンダ研修に参加。担当は助成金、ボランティア調査。

— インターン生が見たウガンダ —

本当の自立—レジリエンスと感謝の心

2014年4月からインターンをしている森口です。インターン業務は、調査・研究を担当しています。

私はウガンダ視察に参加して、自立とは自分が支えられて生きていることを自覚する営みだと学びました。自分が支えられていることに気づかないうちは、それを当たり前だと思い、頼ってしまいます。しかし、自分が他の助けを借りずに生きていくときは、必ず苦労し、同時に今まで他の人がしてくれていたことに対して感謝すると思います。今回お会いして話した元子ども兵の方のほとんどが、現在自立して十分な収入を得ていました。過去に壮絶な体験をし、大切なものをすべて失った人たちが、今は立派に自分の力で収入を得て、自分の家族や子どもという大切なものを守っている姿に心を打たれました。彼らは当会の支援に感謝し、当会の支援がなければ、今の自分はなかったとも言っていました。しかし支援だけでは自立を助けることはできません。彼らはどんなにつらい経験をしても、そこから立ちなおせる力、つまり当会が大切にしている「レジリエンス」を持っていました。当会が彼らと同じ目線に立って支援しているからこそ、レジリエンスが力を発揮し、自立と自治につながり、それが平和につながっているのだと思いました。

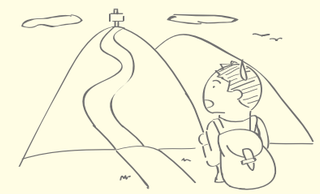
仲良くなった現地の親子。
グルのマーケットにて。

文章／森口雄太 ●神戸市外国語大学英米学科所属。当会理事長の講演会を聞いたことがきっかけで、2014年4月よりインターンを開始。業務は調査・研究を担当し、将来はアフリカ支援活動をしていく予定。

ー「認定NPO法人」をテーマに徹底討論 ー

市民が支え、参画する社会づくりのために

森本純代（京都市市民活動総合センター）×中山麻衣子（税理士）×栗田佳典（テラ・ルネッサンス職員）



認定はNPOのわずか1.4%。その狭き門をくぐるために

栗田　テラ・ルネッサンスは2014年5月30日、京都府の認定では5番目となる、認定NPO法人となりました。そこで、今号の結晶母では、京都を拠点に活動するNPOやボランティア・市民活動に参加したい市民の皆さんをサポートする京都市市民活動総合センターの森本純代さんと、テラ・ルネッサンスの認定取得にお手伝いいただいた中山麻衣子さんをお招きして、「認定NPO法人」をテーマに、認定NPO法人の意義や、役割について詳しく話を進めていきたいと思います。よろしくお願いします。

森本・中山　よろしくお願いします。

栗田　まずは認定NPO法人とはどのような制度なのか説明いただけますか。

中山　詳しくは、別項目で解説しますので、簡単に説明しますね。認定NPO法人は、通常のNPOより、「客観的な要件において、高い公益性をもっている」ことを所轄庁に認定された法人のことです。通常のNPO法人は全国で49310法人（※1）ありますが、認定NPO法人は713法人（※2）であり、全法人の1．4%にしか過ぎません。

栗田　え、そんなに少なかったのですね。驚きました。テラ・ルネッサンスもその仲間入りには、様々な壁がありましたが、中山さんや森本さんの支えのおかげで、それらを乗り越え、認定NPO法人となることができました。改めてありがとうございました。

　では、具体的に認定NPO法人の役割などについて、話を進めていきたいと思いますが、その前に、まずは、テラ・ルネッサンスとの出逢いから、教えていただけますか。

認定NPOを申請するまでの道のり

中山　私は、京都で行われたセミナーの時に、テラ・ルネッサンス理事長の小川さんに「認定をとりませんか？認定の申請業務は、通常の業務をしながらなので事務局の負担が大変です。お手伝いしますので、是非お声かけください」と話したことがきっかけです。

栗田　そうでしたね。その後、本腰を入れて、申請業務に入りました。書類の書き方など、その中で

※1　2014年8月31日現在
https://www.npo-homepage.go.jp/portalsite/syokatsutyobetsu_ninshou.html
※2　平成26年8月31日現在（仮認定含む）
https://www.npo-homepage.go.jp/portalsite/ninteisu_shokatsuchobetsu.html

森本純代（京都市市民活動総合センター）
大学時代に複数のNPOでインターンシップやフィールドワークを経験し、NPOの活動を支える存在に関心を持つ。卒業後、NPO法人きょうとNPOセンターのスタッフとなり、京都市市民活動総合センターを拠点にNPOの情報発信やコーディネート、相談、事業企画などの業務に従事し、NPOの運営課題に向き合っている。

栗田佳典
（テラ・ルネッサンス管理部部長）
大学生時代のインターン経験の後、2009 年よりテラ・ルネッサンス職員に。経理、広報、教育機関での講演などを主な業務としながら、2014 年、認定NPO法人申請業務を担当する。

中山麻衣子（秋岡税理士事務所：税理士）
NPO法成立（1998 年）当時からNPO法人の会計やマネジメントを支援。現在は、会計税務の専門家としてNPOの健全な成長を促進している。

何度もつまづくことも迷うこともあり、その都度、京都市市民活動総合センターの森本さんにも相談していました。

森本　市民活動の促進を目的にした施設ですので、そうした相談をいただけることが嬉しかったです。認定NPO法人になるためには、条例指定など、いくつかの方法があるのですが、絶対値基準を使ってのテラルネさんの取り組みは、本当によくがんばったなと思っています。

中山　補足をしますと、認定NPO法人になるためには、パブリックサポートテスト、通称、PSTと呼ばれる、判断基準があります。絶対値基準、相対値基準、条例個別指定のうち、いずれかの基準を選択することができるのですが、絶対値基準を選びましたよね。

栗田　そうですね。3つの基準の中で、絶対値基準は、簡単に言えば、過去2年間の各年度で、3000円以上の寄附者数が、年平均100人以上であることを求める基準なのですが、テラ・ルネッサンスは幸いにも、対象となる寄附者の人数がすでに100人を超えていたので、この基準を使うことで申請ができるとすぐにわかり、申請書作成に着手しました。

森本　実は、その条件を満たすのも、難しいと言われています。テラルネさんは本当にたくさんの方々から支援をいただいているのですね。

　そもそもですが、NPO法人に対する個人や法人からの寄附を増やし、その活動を支援する目的で、平成23年6月にNPO法が改正されました。そこで、広く一般から支持されているかどうかを測る基準となるPSTも緩和されました。ですが、それでもなお条件が厳しく、申請が難しいといった団体さんは多く、まだまだそのハードルは高いといった現状です。

　私が知っている限りでは、京都市が先駆的に設けた条例個別指定を活用して、認定となった法人が京都では多く、相談を受けていた団体で、絶対値基準での認定はテラルネさんが初めてでしたよ。

栗田　そうだったのですね。それだけたくさんの思いを託してくださっている支援者の皆さまに改めて感謝をしたいです。

認定を取得することはゴールではなくあくまでもスタート

栗田　認定NPO法人が東京以外の地域でも少しずつ増える中で、実際に認定になった団体の変化はどのようなものがあるのですか。

森本　まず、内部としては、組織の基盤整備が整うようになっていると思います。認証時代には必須ではなかった内規の整備も求められるようになり、法令順守に向けたルールの明文化が進みます。「認定NPOだからこそ、守らなければいけない」ということがあるからこそ、組織力の向上につながっていますね。組織の基盤が整うということは、働く方々の環境が整う事にもつながり、結果として、それぞれの支援やサービスに活きてくるものですね。相乗効果があります。

中山　確かにその効果はありますね。内部から、充実していくこともとても大事だと思います。しかし、認定取得後の、アピール力が弱いとも感じますが、いかがでしょうか。

森本　それは私も感じています。

認定はとっているけど、そもそも認定ＮＰＯ法人の表記をしていなかったり、寄付の呼びかけがなかったりするなど、アピールがあまりにも控えめなのではないかとよく感じます。認定はとることがゴールではなく、その制度をいかに多くの方に知っていただき、意思あるお金の流れをつくっていくかだと思います。

　そもそも、市民が参画する社会づくりの仕組みとして生まれた認定ＮＰＯ法人なのですから。

中山　そうですね。ＮＰＯ側が伝えられていないと、そのそもそもの意味がなくなってしまいますね。

森本　そうなんです。もったいないです。

中山　だからこそ、私はテラルネには、しっかりとアピールして下さいと伝えています。ホームページも変えましたよね。

栗田　そうですね。認定ＮＰＯ法人になったことは、あくまでもスタートであり、多くの方に知っていただけるようにウェブサイト内で専用ページやチラシを作り、伝えるようにしています。その効果もあったのか、夏に募集している夏期募金では昨年の倍のご支援をいただくことができました。それにより、コンゴで武装勢力に襲われた村から避難した人々への緊急支援など、柔軟に支援活動を続けることができています。

森本　そうやって成果を伝えることも大事ですね。せっかく認定となり、公益性が高い団体だと認められているんだから、その輪を広げていくため、もっと大きく社会に認めてもらう努力が必要ですね。テラルネさんのさらなる支援と活動の拡大を期待しています。

中山　団体に関わる全員が、税制優遇について説明できることも、認定ＮＰＯ法人が果たす役割だと思います。

栗田　そうですね。支援者の皆さまに誰が聞かれても、認定ＮＰＯ法人の説明ができる体制にしておきたいと思います。

森本　その体制を整えて、認定ＮＰＯ法人に寄付をするということは、こういうメリットがあるのですよと積極的に声を出していく。そうした正当な貪欲さとでもいうのでしょうか。これはすごく大事ですね。

栗田　なるほど。内容を理解し、自分たちの声でアピールしていく。その積極性も、心がけていきたいと思います。

意思ある「お金」の流れをつくっていくことが大切

森本　そもそもＮＰＯは、市民がそれぞれの意志で支えるものであり、行政が支えるものではありません。これまで行政から、補助金や助成金などを通して支援することがあったかもしれませんが、企業を含む市民が直接ＮＰＯに支援をすることで、よりその意思を直接反映することができます。市民が直接動く。その分だけ、自分も税制優遇を得られるのです（※3）。

中山　確かに、そこの認識が欠如していて、税金は徴収されるものというイメージが根強いですよね。「とられる」という感覚が強い。そこから離れて、自分で自分の国に対してのお金の使い道が選べるのだと伝えたいです。その手段のひとつとして認定ＮＰＯ法人があるのですから。

森本　市民から支援を集めやすくなる認定ＮＰＯ法人の制度だからこそ、支援者にもメリットがあることを、認定ＮＰＯ法人さんには伝えていって欲しいです。特に、テラルネさんはピースビルダー（平和の担い手）の育成と位置付けて、講演をし、伝え、広め、参加の入り口を作っていると思います。その入り口の一つが寄付をするというアクションですよね。お金の使い道を自分で決めることの意義をもっと主張してほしいですね。

栗田　自分で選択する。つまり、意思あるお金の流れをつくっていく。そしてそれを伝えていくということですね。

森本　そうです。それはすっごく大事。

中山　うん。そうですね。そうなると、よりテラルネは見られる目が厳しくなると思います。でもそれが理想の形です。支援者が思いを託すだけでなく、会計報告などもしっかりと確認し、お金に意思をのっけて、活動を支える社会がいいですね。

森本　そうなんですよ。あらゆる法人形態で、ＮＰＯ法人ほど、情報公開がされている法人はないと思います。ウェブサイトには過去の会計報告が細かく載っています。市民の皆さんが、活動への共感だけでなく、そうした組織としての透明性も含め、支援するべきかどうかを自分の力で判断することで、ＮＰＯも成長していくと思います。

中山　認定ＮＰＯ法人は通常のＮＰＯ法人よりも、ステージを一段あげないといけません。公益性を意識していくためにどうしていけばいいのか、これから考えていく必要がありますね。認定ＮＰＯ法人として、公益性を満たしている要件は定められていますが、それ以外のルールがないのです。だからこそ、認定ＮＰＯ法人になった今、テラルネは先導しながら、「この団体、認定とっているからさすがに違うね」と行動にも、ミッション遂行の上にもプラスアルファしなきゃいけないのです。

森本　一つの地域において、同じテーマで活動する団体も増えてきました。そんな中、自分たちのよさ、らしさを出すために、もちろん活動も頑張るけど、他とは違うという差別化が必要ですね。

ＮＰＯがＮＰＯであるためには市民の支えが必要

栗田　そうですね。「認定」ＮＰＯ法人テラ・ルネッサンスのらしさを出す努力が必要だと改めて感じています。具体的に、私たちがすべきことは何でしょうか。

森本　まず一つ目は、同じ業界のＮＰＯへの意識変革です。行政からの委託を受けることが安定した運営につながるという理解もあったりします。もちろん、パートナーとなって行政と協働するのは大事ですが、ＮＰＯがＮＰＯであるためには、市民の支えが必要なのです。

中山　ＮＰＯ自身が、自分たちの活動を支えるのは市民でなく、行政だという感覚があるということですね。

森本　はい。その意識を変えるためにも、テラルネさんには、「自分たちの活動を支えるのは行政ではなく、市民だ」とアピールしていく役割があるのだと思うのです。全ＮＰＯに向けて発信し、引っ張っていってほしいです。

中山　市民から信頼され、支えられている結果、寄付金が増えたと

武装勢力の襲撃の被害に遭った住民と（コンゴ）

※3　認定ＮＰＯ法人への寄付は、寄付金控除などの税制上の優遇措置の対象となる（所得税、法人税、相続税）。個人の寄付の場合、税額控除の割合は、寄付金から２０００円を引いた額の40％に。詳細はＰ44の認定ＮＰＯ法人って？参照。

京都府府民生活部府民力推進課の鈴木課長と認定通知書を持つ栗田

いう話も聞きます。信頼は大事ですね。例えば、テラ・ルネッサンスだったら、認定NPO法人になりました、私たちはこんな約束をします、など新しいテラ・ルネッサンスマニフェストをしっかりと出すのも一つの手段です。

森本　NPO法の仕組み自体が、なんでここまで行政の関与を極限まで省いてこの制度にしているのか、という原点に立ち返り、ここまでオープンに情報を提示することで、市民が自分で選んで、支援していくことで、本当に大切な活動を行う団体が残っていくのだと思います。

　そして、NPOが活動する。それを大事に思う市民がいる。だからこそ、応援の輪が広がる。その応援が続くことにより、活動が持続していくというサイクルがどんどんまわっていけるように、仕掛けていってほしいです。

栗田　企業との協働はいかがでしょうか。

NPOが企業と協働するには〝信頼〟が鍵になる

森本　企業さんとNPOのコーディネートをしていて感じるのは、市民以上に信頼性を企業さんは要求するということです。組織対組織になるので、しっかりと相手を見定めます。一度そのハードルを越え、信用できるとわかれば、大きな力にもなってくれます。昨今もNPOに関する、色々な事件がありますが、ちゃんとやっているところもあるんだと見せていくことが大事ですね。

　そうした信頼を集めていくために、認定NPO法人は、NPOの牽引役でもあると言えます。

中山　そうですね。他にも、新聞の社会面にコメントを寄せるNPO法人が多くなりましたが、そのほとんど認定NPO法人の職員や理事ですね。認定をとっていることは、NPO法人の中のトップランナーとして走っていることを自覚して、活動に取り組んでほしいです。

栗田　確かに、認定をとってから、企業さんの協働や表彰などの機会をいただいています。寄付をしたいけど、認定ではないからとの理由で検討される企業さんもおり、その悩みをなくすことができたのも、認定NPO法人になったからこその成果です。

森本　ある意味、認定をとるというのは、独自で寄付を集めることもできる「独立した」団体であるという感覚でもありますね。

栗田　確かに、そう思います。認定NPO法人となったことで、より独立した団体になったように思います。「成人」になったという感覚に近いですね。

　先ほど、NPOの牽引役という言葉が出ましたが、私は、東京ではなく、ここ京都で、認定NPO法人となり、活動していくことにも意義があると感じています。

地方のNPOが認定を取得することに意義がある

中山　そうそう。小川さんに認定NPO法人になりませんかと声をかけたのは、そこなんです。東京以外のNPO団体である、テラ・ルネッサンスがとる意義は大きいと思っていました。認定NPO法人のうち、およそ半分は東京で占めています。それが本当の市民社会と呼べるのでしょうか。日本全国での、寄付文化の醸成を目指す

私の目標とも重なり、テラルネの認定NPO法人に向けて、私も一歩を踏み出せました。

栗田　それまでは、とりたいけど手続きを進めるのが…と悩んでいた私の背中を押してくれたのが、中山さんでした。おかげさまで、5月に認定NPO法人になることができました。

　私は、京都でも認定NPO法人になれること、そして市民を巻き込んで活動を行えることを証明し、日本に伝えていきたいです。それぞれの地域で大切な活動をされている団体があります。その団体さんの力になれたらと思っています。

栗田　地域密着型の国際協力団体として、テラ・ルネッサンスは成長していきたいと考えています。地の利を生かした活動の促進も検討しています。2014年の11月には清水寺での国際協力イベントにも参加することができました。個人的には、京都の特徴でもある、外国人観光客や修学旅行生もうまく結びつけながら、支援の輪を広げていきたいと考えています。

認定NPO法人を通して、次世代につなぐべきこと

森本　以前、神奈川の中学生が修学旅行で京都のNPOを訪れました。テラルネさんにも何名か訪問しましたよね。その後、私は生徒たちの発表会に赴いたことがあります。まだ中学生なのでお金はないけど、自分たちにできることを一生懸命に考えていました。彼らの心に、何かが残り、それがこれからの彼らの生活の糧になると私は思いました。

　中学生という多感であり、自分の世界がどんどんと広がっていく時間に、多様な価値観に触れるのが大切ですよね。

栗田　私もそう思います。市民は大人だけでなく、もちろん子どもも含まれていて、幅広い世代をどのように巻き込んでいけるかを考えながら、仕掛けていくのは大事かなと思います。それにあたり、認定がついていると信頼度も増すと思います。認定だからこそ、私たちが、先導して子どもたちも巻き込み、活動を進めていかなければいけないと自覚しています。

森本　大変な思いをして認定NPO法人をとったんだから、「使わなきゃ！」ですよ。

中山　そうですよ、栗田さん！認定NPO法人としてあるべき像をテラ・ルネッサンスがつくっていくことを期待しています。

森本　そういう意味では、テラルネさんは先駆者としての役割もあるのでしょうね。

栗田　そうですね。まず、私たちが実践をする。そこで培った経験と知識を、認定NPOを目指す団体に共有しながら、この業界の底上げをしていけたらと思います。市民と現地の受益者のつなぎ目として、NPOとNPOのつなぎ目として、行政と市民のつなぎ目として、先導し、次世代につなげていきたいと思います。

中山　そして、より多くの支援を集め、社会に還元していきましょう。

栗田　はい。寄付は、自らの意志で社会に参画する手段のひとつです。市民が支え、参画する社会になることで、より多くの課題の解決へとつながることを信じ、私たちの活動も続けていきたいと思います。そして、関心の輪を広げ、すべての生命が安心して生活できる社会の実現を目指していきます。今日はありがとうございました。

税理士マイコが教える

認定NPO法人徹底解説!!

テラ・ルネッサンスは平成26年5月30日より、京都府から認定を受けた認定NPO法人となりました。5月30日以降の当会へのご寄付は、寄附金控除などの税制上の優遇措置の対象となります（所得税、法人税、相続税）。平成26年5月29日までのご寄付は、対象になりませんので、予めご了承ください。個人のご寄付の場合、税額控除を選択した場合の割合は、寄付金から2,000円を引いた額の40％になります。

日直
小川 鬼丸

監修：中山麻衣子（秋岡税理士事務所：税理士）　イラストレーション：辻井優利（テラ・ルネッサンス インターン）

Q1 そもそも認定ＮＰＯ法人とは何ですか？

（1）広く一般から支持を受けているか、（2）その活動や組織運営が適正におこなわれているか、（3）より多くの情報公開が行われているか、等の一定の要件を満たした、団体にのみ、所轄庁から認定を受ける法人をいいます。認定となったことで、寄付者の方には税制上の優遇措置を受けることができます。

Q2 税制上の優遇措置とは、どういうことですか？

支援者の皆さんに関連する優遇措置は、以下の3点が挙げられます。（1）個人が認定NPO法人へ寄付をした場合に寄附金控除が受けられます。（2）法人が認定NPO法人へ寄付をした場合に損金に算入する枠が広がります。（3）相続により財産を取得した人が認定NPO法人へ寄付をした場合に寄付をした財産が相続税の課税対象から外れます。

Q3 個人の寄付による寄附金控除について教えてください。

以下の図をご覧ください。認定NPO法人へ寄付をした金額−2千円が対象となり、国税分と地方税分が控除されます。
お住まいの地域により、異なりますが、京都府京都市在住の方は最大50%が控除となります。

【税額控除を利用した事例 】
年収 300 万円の京都市在住の方が、
テラ・ルネッサンスに
年間 1 万円を寄付した場合

寄付した金額
10,000 円 − 2,000 円

- ×40%（ 国税分※1 ）＝ 3,200 円
- ×10%（ 地方税分※2 ）＝ 800 円

控除される金額
4,000 円

※1　国税（所得税）分は、所得控除方式、もしくは税額控除方式のどちらかを選ぶことができます。
どちらが有利になるかは、所得によって、異なります。詳しくは最寄りの税務署へお問い合わせください。

（1）所得控除方式（その年の所得から減額される）
（＊寄附金の合計額−2,000円）×所得税率＝寄附金控除額
＊寄附金の合計額は総所得金額の40%が限度

（2）税額控除方式（その年の所得税から控除される）
（＊寄附金の合計額−2,000円）×40%＝＊＊寄附金控除額
＊寄附金の合計額は総所得金額の40%が限度
＊＊その年分の所得税額の25%が限度

※2　地方税分とは、住民税からの控除となります。
京都府内に住所地がある方は府民税（4%）、かつ京都市内に住所地がある方は市民税（6%）の控除を受けることができます。

Q4 控除を受けるために個人で必要なことは何ですか？

以下の手順で対応をお願いします。
（1）テラ・ルネッサンスから領収書が届きますので、必ず保管をお願いします。
（2）確定申告を行ってください。（1月1日から12月31日までに行った寄付について、翌年3月15日までに最寄りの税務署へ）
（3）確定申告書に（1）の領収書を添付してください。

Q5 サラリーマンです。年末調整で調整いただけますか？

年末調整では、寄附金控除を受けることができませんので、ご注意ください。必ず、確定申告をお願いします。

Q6 法人が受けられる優遇措置とはどのようなものですか。

法人の場合は、（1）一般寄付金の損金算入限度額とは別に、（2）特別損金算入限度額が設けられており、その範囲内で、損金として算入することができます。限度額は、資本金等によって、異なります。詳しくは最寄りの税務署、もしくは税理士にお問い合わせください。

（1）一般損金算入枠：（資本金等の額×0.25%+所得金額×2.5%）×1/4
（2）特別損金算入枠：（資本金等の額×0.375%+所得金額×6.25%）×1/2

以下の具体例をご参照ください。

	損金算入枠（認定NPO法人）		損金算入枠（これまで）
資本金：1000万円 所　得：100万円の法人が寄付する場合	6.25万円	←	1.25万円
資本金：10億円 所　得：3億円の法人が寄付する場合	1.375万円	←	250万円

Q7 損金算入をするためにどのような手続きが必要ですか。

認定NPO法人に対する寄付金を損金に算入するには、確定申告書にその金額を記載し、寄付金の明細書を添付するとともに、当会発行の領収証を保存している必要があります。領収証はその都度、大切に保管してください。紛失による、領収証の再発行はできません。

Q8 個人で寄付をしました。領収証を発行いただきたいのですが。

個人の寄付者様へは、年に1回、毎年12月31日締めで1年分まとめて、翌1月下旬〜2月上旬頃に郵送にてお送りします。到着まで今しばらくお待ちくださいませ。

Q9 法人で寄付をしました。領収証を発行いただきたいのですが。

法人さまへは、入金を確認後、速やかに発行いたします。

Q10 匿名や連名で出した寄付の領収証はどのように対応してくれますか。

匿名での領収証発行はできません。連名によるご寄付で領収証をご希望の場合は、必ず代表者の方をご記入ください。また、領収証の再発行はできませんので、予めご了承ください。

Q11 領収証の宛名を変更してほしいのですが。

領収書の宛名は、ご寄付の際にお知らせいただいた名義でお送りします。変更をご希望の場合は、必ずテラ・ルネッサンスまでお問い合わせください。

Q12 クレジットカードで寄付をしました。領収証を発行いただきたいのですが。

カード決済後、決済代行会社より当会へ入金された日が領収証の日付となります。決済終了後、2〜3か月遅れることになりますので、予めご了承ください。特に年末のご寄付につきましては、翌年の確定申告の対象となります。予めご了承ください。（例：12月にクレジットカードで寄付を決済。テラ・ルネッサンスには翌年2月に着金。領収書の日付は2月になります。）

Q13 会費は対象となりますか。

正会員（30,000円/年）は、総会の議決権を保有することになるため、対象外となっています。個人賛助会員、ジュニア会員、ファンクラブ会員、団体賛助会員につきましては、寄附金控除の対象となります。また、正会員の方でも、30,000円を超える金額については寄附金控除の対象となります。正会員費の30,000円分のみ、寄附金控除の対象にならない別の形式での領収書となります。

Q14 わからないことがあります。どこに聞けば良いでしょうか。

不明な点は、テラ・ルネッサンス事務局もしくは最寄りの税務署にお問い合わせください。
認定NPO法人テラ・ルネッサンス事務局／担当：栗田（くりた）
TEL：075−741−8786（月〜土：10時〜18時）　MAIL：kurita@terra-r.jp

カンボジア、ロカブッス村で裁縫技術訓練が修了し、自宅をお店を開いて喜ぶチュオン・ソムナンさん

私たちは、
『テラ・ルネッサンス』を応援しています！

中井隆栄経営塾
『幸せな成功者』育成塾
塾長　中井隆栄＆塾生一同

http://www.magiclamp.co.jp/

『スマピク』
http://smapic.jupiter.co.jp/official/
ジュピターが贈るピクチャーロジックパズルの決定版が、
スマートフォンアプリでついに登場！

jupiter

株式会社 ジュピター
〒612-8368京都市伏見区周防町331番の16
Tel.075-604-0200(代)
http://www.jupiter.co.jp

有限会社アイディー
＜学習型人材派遣＞
人と人のつながりを大切にします。
実践することで人生を豊かにしましょう！
〒518-0833
三重県伊賀市緑ケ丘東町914-2　美旗屋ビル201
電話　0595-21-7776
代表取締役　藤川直紀
よかったら
見てください。
検索→
「社長TV
藤川直紀」

伊豆の自然と歴史、
文化をお菓子に託し
お客様の笑顔と
至福の時間を
創造します。
伊豆 石舟庵 せきしゅうあん
桜まんじゅう

いい会社をふやしましょう
鎌倉投信
KAMAKURA TOUSHIN
鎌倉投信株式会社
〒248-0005 神奈川県鎌倉市雪ノ下4丁目5-9
お問い合わせ先 TEL: 050-3536-3300
Email: Contact@kamakuraim.jp

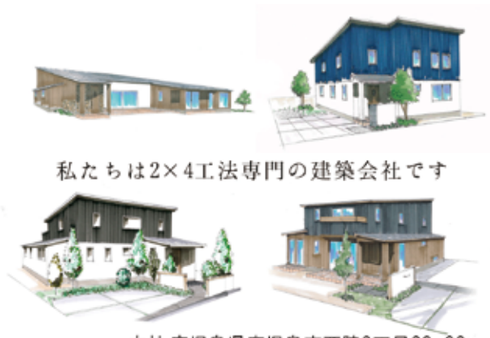
人々と出会う旅
オルタナティブツアー
MY TICKET
航空券
海外旅行
スタディツアー/海外体験学習
ご相談ください！
マイチケットがオルタナティブツアーを始めたのは1981年。長年の「人々と出会う旅」の経験を生かし、海外旅行のお手伝いをいたします。
国際協力の現場を訪れる「スタディツアー／ワークキャンプ」や大学の「海外体験学習」など、観光旅行とは異なり、旅程管理や危機管理の難しいツアーも経験豊富です。ご相談ください！
個人旅行・海外出張のご相談も―
マイチケット
航空券・ホテル・査証・ガイド通訳
〒660-0084 尼崎市武庫川町4-27-1
TEL 06-4869-3444
info@myticket.jp
www.myticket.jp

私たちの思いは、
ウガンダの思いでもある。
『テラ・ルネッサンス』
を応援しています！
CRYSTAL COFFEE
UGANDA BUGISHU ELGON COFFEE
http://www.crystalcoffee.jp/

建設業を通して
「夢と希望を失わない社会造り」
に貢献し続けます
武 丸武建設株式会社
代表取締役社長　菊池　正美
〒981-3111 宮城県仙台市泉区松森字新田19－3
TEL　022－373－8221
FAX　022－373－8438
http://www.marutake-kensetsu.co.jp/

比べてわかる！クロカワの確かな技術!!
黒川クリーニング社
本社／福井県坂井市春江町随応寺20 0120-33-4646
http://www.kurokawa.jp E-mail : white@kurokawa.jp

気づきとホスピタリティーの精神で
「感動の家づくり」を実践致します



TOTAL HOUSING Co.
www.total-housing.net
本社:鹿児島県鹿児島市西陵3丁目28-22
TEL 099-210-5120 / FAX 099-282-3003

株式会社　西井製作所

本社・工場
〒736-0055　広島県安芸郡海田町南明神町1番17号　電話 (082)821-0241　FAX (082)821-2494
Mail：nishii@hiroshima-nishii.co.jp　URL： http //www.hiroshima-nishii.co.jp
鳥栖工場
〒841-0005　佐賀県鳥栖市弥生が丘7丁目11番地　電話 (0942)87-7550　FAX (0942)87-7560
《営業品目》
自動車ナンバープレート
各種標識、電気部品、棺金具、各種塗装品
航空機部品・半導体部品・半導体関連機器・精密治具金型
各種自動機設計・開発・検査

京都・滋賀の住設機器　管工機材のことなら、私たちにお任せ下さい！

株式会社　ヒトミ
京都府京都市伏見区深草西浦町 8 丁目 133-1・2
TEL：(075)642-4121　HP：http://www.hitomi-net.jp/index.html

みなさまのご支援が私たちの力です。
認定NPO法人テラ・ルネッサンスを
これからも、よろしくお願い致します。

Yakult
「健康で美しく。
免疫ライフ
創造パートナー」
水戸ヤクルト販売株式会社　代表取締役社長 内藤 学
〒311-4164 水戸市谷津町1-35 水戸西流通センター内
TEL 029-251-8960(代)　FAX 029-254-7276

テラ・ルネッサンス×メディアスイート
「カンボジア子ども通学支援プロジェクト」発足！

MEDIA SWEET
〒542-0081 大阪府大阪市中央区南船場1丁目3-21グラスコートビル4F
TEL：06-6261-4001 FAX：06-6261-4002
URL：http://www.media-sweet.co.jp/

崇元寺石門向かい
RYUKYU
(株)琉球補聴器

-きこえの絆をこの島へ-
(098)863-4133
ヨイミミ

飲みやすく、1食でたんぱく質を20g摂取できる！
高品質ホエイプロテイン
トップアスリートも絶賛！ 広島カープ盗塁王 丸佳浩選手やバンバシフィック水泳銀メダリスト 山口美咲選手をはじめ、Jリーガー、ラグビートップリーグ選手など多数のアスリートが愛飲

ご注文・お問い合わせはお電話またはwebから
0120-242-044
ビーレジェンド　検索
株式会社 Real Style 〒635-0061 奈良県大和高田市礒野東1-10上田ビル5F（電話受付時間）平日10時～18時

gobon　進化する会社には、変化できるオフィスを
思い立ったとき、すぐさま希望の空間へとゾーニング。
気軽に模様替えをする感覚で、オフィスのレイアウト変更が可能になります。
・急に来客が増え、会議室では足りない
・ワークショップをする時に場を分けたい
・オフィスに隠れ家をつくりたい
・避難所のプライバシー確保をしたい

働く環境の総合商社
株式会社ウエダ本社　TEL 075-341-4111　FAX 075-341-5738　〒600-8103 京都府京都市下京区 五条通堺町角塩釜町 363

onze holdings
onze confiance　不動産企画
onze plus　不動産販売
onze leavest　賃貸管理・リーシング
onze deco　設計監理
aiaru onze　保育・福祉

オンズグループは、ライフパートナー企業として
テラ・ルネッサンスを応援します。

株式会社オンズホールディングス
〒100-0013　東京都千代田区霞が関1-4-2　大同生命霞が関ビル 3F
TEL：03-5157-0191　FAX：03-5157-0117
onze group

結晶母
テラルネ Vol. 03

2014年11月25日発行

発行責任者：小川真吾
発行：認定NPO法人テラ・ルネッサンス
〒600-8191 京都府京都市下京区五条高倉角堺町21番地 jimukinoueda bldg. 403号室
TEL&FAX：075-741-8786　E-mail：contact@terra-r.jp
Web：www.terra-r.jp　facebook：terra.ngo　twitter：@terra_ngo

□ デザイン
小田起世和（広報企画・デザイン担当）
□ 編集
牧野由起子（京都事務局 職員）
□ 表紙デザイン
小田起世和（広報企画・デザイン担当）
池堂麻理奈（インターンII期生：2013年度）
□ アートワーク（切り絵）
池堂麻理奈（インターンII期生：2013年度）
□ 撮影
芦沢博稔（インターンI0期生：2012年度）

＊本書の一部またはすべてを複写、転載引用する際には、
あらかじめテラ・ルネッサンス事務局あてにご連絡ください。

受賞報告

第25回 ヒューマンかざぐるま賞

［公益財団法人 京都オムロン地域協力基金］

第4回 自由都市・堺 平和貢献賞

［大阪府堺市］

2001年カンボジアからはじまった支援活動が、
この13年間でウガンダ、ラオス、ブルンジ、コンゴ民主共和国と活動地を広げ、
岩手県にて復興支援を行うまでに至りました。

これらの活動は、支援者の皆さま、
ともに理念追求のために行動してくれるスタッフ、インターン、そして何より、
ウガンダやコンゴ、ブルンジ、カンボジア、ラオス、岩手において
自らの「ちから」で立ち上がろうとする人々のおかげで受賞できたものです。

今後もテラ・ルネッサンスはスタッフ一同、心と力を合わせて、世界中の協力者とともに、
すべての生命が安心して生活できる社会の実現をめざし、活動を続けて参ります。

認定NPO法人 テラ・ルネッサンス　理事長　小川 真吾

Terra Renaissance

ひとり一人に未来をつくる力がある

認定NPO法人 テラ・ルネッサンス

認定NPO法人テラ・ルネッサンス　公式サイト【 www.terra-r.jp 】　フェイスブック【 terra.ngo 】　ツイッター【 @terra_ngo 】
〒600-8191　京都府京都市下京区五条高倉角堺町21番地　jimukinoueda bldg. 403号室　TEL/FAX : 075-741-8786　E-mail : contact@terra-r.jp